

# 中畑遺跡発掘調査概要Ⅱ

— 府営農地還元資源利活用事業「櫛田地区」の調査 —

2006年3月

大阪府教育委員会



## はじめに

中畑遺跡は、高槻市大字中畑に所在し、大阪府の東北端部に位置し、府内では希少になった山と緑に囲まれた北摂山地に存在する山間小盆地に立地しています。

中畑を含めた周辺の田能、二料、杉生、出灰などのいくつかの山間小盆地によって構成された集落には、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての文献が数多く残存し、これらの時代の研究上重要な地位を占めており、歴史的に著名な地域です。しかし、埋蔵文化財については、田能盆地で、高槻市教育委員会が遺跡分布調査を実施し、田能北遺跡、田能南遺跡を発見した以外には、これまで実態が不明でした。ところが、農地関連事業に伴う過去5年間に実施された発掘調査や遺跡確認調査によって、徐々に遺跡の状況が明らかになってきています。

今回の中畑遺跡の発掘調査は、府営農地還元資源利活用事業「檜田地区」に先立って、平成16年度に実施し、平成17年に発掘調査概要を作成したものです。

中畑遺跡は、田能盆地の東側に所在する中畑盆地全域に広がる遺跡です。今年度の調査では、昨年度の調査で発見されなかった平安時代の建物・遺物を中心に中世の遺構・遺物などを検出しました。これらにより前年度に検出した中世の遺構・遺物より遡り、田能盆地とほぼ同じ平安時代初期には開発が始まったことが明らかになりました。

これらの調査成果は、この周辺地域の歴史を考える上で、また北摂山地の開発の状況を知るうえで貴重な資料を提供したものといたします。

最後になりましたが、発掘調査にあたってご協力いただきました高槻市教育委員会、大阪府北部農と緑の総合事務所、檜田地区土地改良区、地元自治会各位をはじめとする多くの関係者の方々に厚く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政について変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます次第です。

平成18年3月

大阪府教育委員会  
文化財保護課長 丹上 務

## 例 言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府環境農林水産部の依頼を受け、府営農地還元資源利活用事業「檜田地区」に先立って平成16年度に発掘調査を実施し、平成17年度に府営経営体育成基盤整備事業として発掘調査概要を作成した、高槻市大字中畑所在中畑遺跡の発掘調査概要Ⅱである。
2. 現地調査は、文化財保護課調査第一グループ技師奥和之が担当し、それに伴う整理作業は、調査管理グループ技師林日佐子、藤田道子が並行して行い、平成17年3月に全ての作業を終了し、平成18年3月に発掘調査概要を作成した。
3. 調査に要した経費および発掘調査概要の印刷製本費は、農林水産省および文部科学省の補助金を得て、大阪府環境農林水産部および大阪府教育委員会が負担した。
4. 調査の実施にあたっては、高槻市教育委員会、大阪府環境農林水産部、大阪府北部農と緑の総合事務所、檜田地区土地改良区、森田克行、橋本久和（高槻市教育委員会）をはじめとする諸機関、諸氏の方々の協力を得た。
5. 本書の写真測量は、大阪測量株式会社に委託した。なお、撮影フィルムについては、同社が保管している。また、遺物の写真撮影については、有限会社阿南写真工房に委託した。
6. 本書の編集、執筆は、奥が担当した。
7. 本概要は300部作成し、一部あたりの単価は942円である。

## 凡 例

1. 座標については世界測地系平面直角座標（第Ⅵ系）、方位については座標北、標高については東京湾平均海水面（T. P.）を基準とした。
2. 土色の色調については、小山正忠・竹原秀雄「新版標準土色帳」日本色彩研究所 1992を使用した。
3. 遺構番号については、基本的に調査区毎に個々の遺構について1から順番に番号を付けた。また、複数の遺構でひとつの遺構を形成するものについては、「建物11-1」のように先に遺構名を明記し、調査区名、番号を付けた。
5. 遺物については、挿図、図版の番号と一致させた。



# 目次

はじめに

例言

目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第2章 調査の成果	3
第1節 概要	3
第2節 11区の調査	3
第3節 12区の調査	10
第4節 13・14区の調査	15
第5節 15区の調査	20
第3章 まとめ	21

抄録

## 挿図目次

第1図 大阪府と調査地点	1	第16図 13・14区平面図	14
第2図 中畑遺跡調査区位置図	2	第17図 13・14区基本層序図	15
第3図 11区基本層序図	3	第18図 13区炉跡平面・断面図	15
第4図 11区平面図	4	第19図 柱穴13-15遺物出土状況図	16
第5図 建物11-1平面・断面図	5	第20図 柱穴13-15出土遺物	16
第6図 建物11-2平面・断面図	6	第21図 風倒木痕14-21出土遺物	16
第7図 建物11-3平面・断面図	7	第22図 溝13-12断面図	17
第8図 建物11-3 SP17出土遺物	7	第23図 溝14-2断面図	17
第9図 建物11-4平面・断面図	8	第24図 溝14-2出土遺物	17
第10図 11区出土遺物1	9	第25図 落ち込み14-20出土遺物	18
第11図 11区出土遺物2	9	第26図 14区出土遺物	19
第12図 12区基本層序図	10	第27図 15区平面図	20
第13図 12区平面図	11	第28図 15区基本層序図	20
第14図 12区焼土坑平面・断面図	12	第29図 15区出土遺物	20
第15図 12区出土遺物	13		

# 図版目次

図版表紙 中畑地区全景（西上空より）

図版1 11区

1. 全景（西より）
2. 南側柱穴群（南より）
3. 基本断面南壁
4. 基本断面北壁
5. 基本断面西壁

図版2 11区

1. 建物1（東より）
2. 建物1 SP1断面
3. 建物1 SP2断面
4. 建物1 SP3断面
5. 建物1 SP4断面
6. 建物1 SP5断面
7. 建物1 SP6断面
8. 建物1 SP7断面
9. 建物1 SP13断面
10. 建物1 SP32断面

図版3 11区

1. 建物2・3（南より）
2. 建物2 SP10断面
3. 建物2 SP11断面
4. 建物3 SP15断面
5. 建物3 SP15遺物出土状況
6. 建物3 SP16断面
7. 建物3 SP17断面

図版4 11区

1. 建物4（北西より）

2. 建物4 SP60断面

3. 建物4 SP61断面

4. SP64断面

5. SP62断面

6. 南側柱穴群 SP46断面

7. 南側柱穴群 SP54断面

8. 南側柱穴群 SP57断面

9. 南側柱穴群 SP58断面

図版5 12・13区

1. 12区全景（南より）

2. 12区基本断面（埋積谷部）

3. 12区基本断面（丘陵斜面部）

4. 12区 土坑12-4断面

5. 12区 土坑12-4（南より）

6. 13区 溝13-12（南より）

図版6 13・14区

1. 13区 南側全景（西より）

2. 13区 柱穴13-15遺物出土状況（南より）

3. 13区基本断面

4. 14区 溝14-2断面

図版7 14・15区

1. 14区北側全景（北西より）

2. 14区南側全景（北より）

3. 15区全景（南より）

図版8 出土遺物

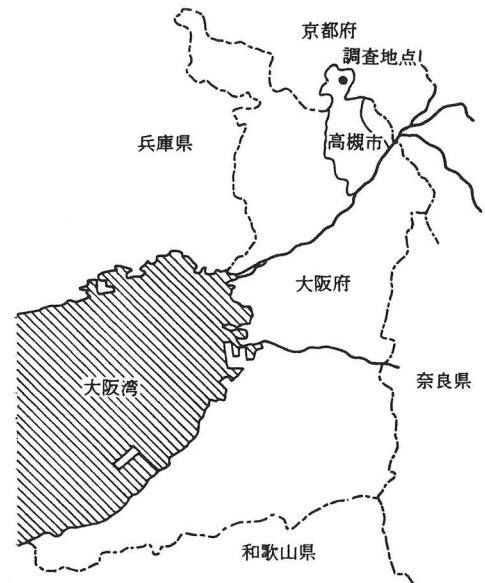
図版9 出土遺物

図版10 出土遺物

# 第1章 調査の経緯と経過

今回調査を実施した中畑遺跡は、行政区画で言えば、高槻市大字中畑に所在する。中畑地区は、周辺に存在する田能、出灰、二料、杉生などの地区を加えて檜田と呼ばれている。その檜田地区（第1図）は、高槻市の北部、市街区域から約12km離れた大阪府の北東部、北摂山地の穏やかな山々に囲まれた標高350m前後を測る小規模ないくつかの山間盆地により成り立ち、北と西を亀岡市、東を京都市と接しており、大阪府の形状からいえば、北に瘤状に飛び出した形をなしている。その中でも中畑地区は、最も東北側に位置している。

今回の発掘調査の経緯となった大阪府営農地還元資源利活用事業（檜田地区）は、山間盆地の比較的傾斜のきつく狭小不整形で統一性のない耕地を、府内の公共事業などによって生じた残土を利用し埋め立て、広い水田に整備し、農作業の効率化を図ろうとする事業である。



第1図 大阪府と調査地点

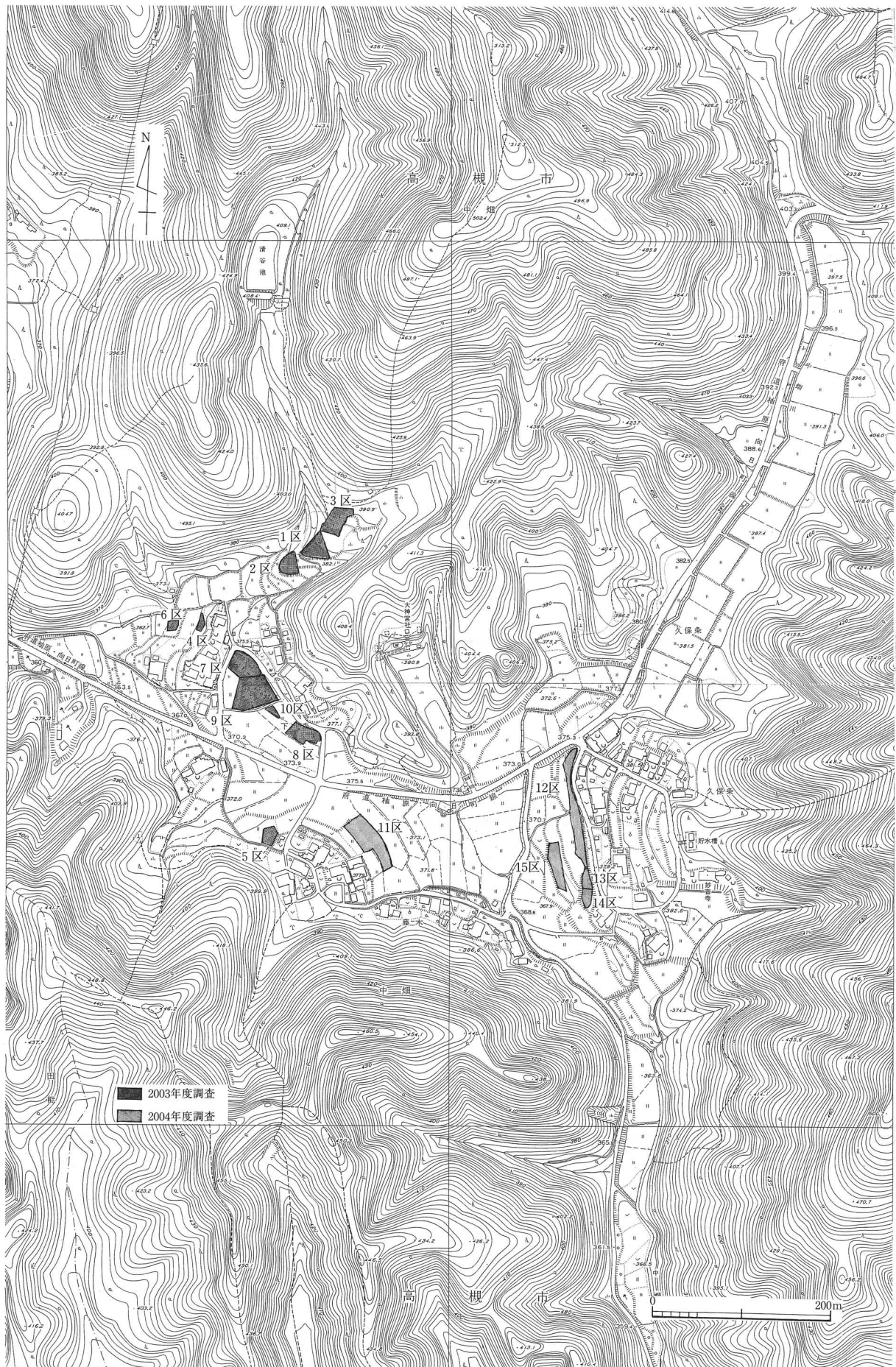
これに伴う発掘調査および遺跡確認調査は、本府環境農林水産部と本府教育委員会と協議を行い本府教育委員会によって実施した。地区内の調査は、平成11年度に実施した田能地区内の遺跡確認調査<sup>(1)</sup>を皮切りに、5年間継続して実施し、平成11年度に神宮寺西遺跡、田能城跡<sup>(2)</sup>。平成12年度に、田能北遺跡（A地区）、田能南遺跡。平成13年度に田能北遺跡（B～I地区）<sup>(3)</sup>。平成14年度に、田能北遺跡（K～Q地区）、中畑地区の遺跡確認調査<sup>(4)</sup>、平成15年度に中畑遺跡（1区～10区）<sup>(5)</sup>などの調査を行い、数々の調査成果を得た。

今回の中畑遺跡の発掘調査（11区～15区）は、平成16年6月30日に開始し、平成17年2月26日をもって終了した。調査面積は、3,334㎡を測る。今回の中畑遺跡の発掘調査によって当該事業に伴う発掘調査は、平成16年度を持って終了することとなった。

調査の方法は、基本的に厚さ0.3mの耕作土層、床土層および盛土層を機械によって除去し、その後人力により、遺物包含層を地山まで掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

註>

- 1) 大阪府教育委員会 『田能地区遺跡確認調査概要』 2000
- 2) 大阪府教育委員会 『田能遺跡群発掘調査概要・Ⅱ』 2001
- 3) 大阪府教育委員会 『田能遺跡群発掘調査概要・Ⅲ』 2002
- 4) 大阪府教育委員会 『田能遺跡群発掘調査概要・Ⅳ』 2003
- 5) 大阪府教育委員会 『中畑遺跡発掘調査概要』 2004



第2図 中畑遺跡調査区位置図

## 第2章 調査の成果

### 第1節 概要

中畑遺跡は、当該事業に伴い平成14年度の遺跡確認調査によって新たに発見された遺跡で、基本的に中畑盆地全域（図版表紙）に広がり、東西長約120m、南北幅約300mを測る。

今年度の発掘調査地区は、中畑地区の東側を中心として実施した。調査区域（第2図、図版表紙）は、大きく分けて中畑南地区（11区）、中畑東地区（12・13・14・15区）の2箇所に分散している。今回の調査区域は、当該事業に伴って遺構が削平される地区に限定して行ったため、5調査区におよぶ。調査区の名称は前年度の調査区番号を踏襲し、11区から15区までの番号を用いた。

今回の調査によって検出した遺構は、建物4棟、土坑2基、柱穴、溝2本、炉跡2基などである。

### 第2節 11区の調査

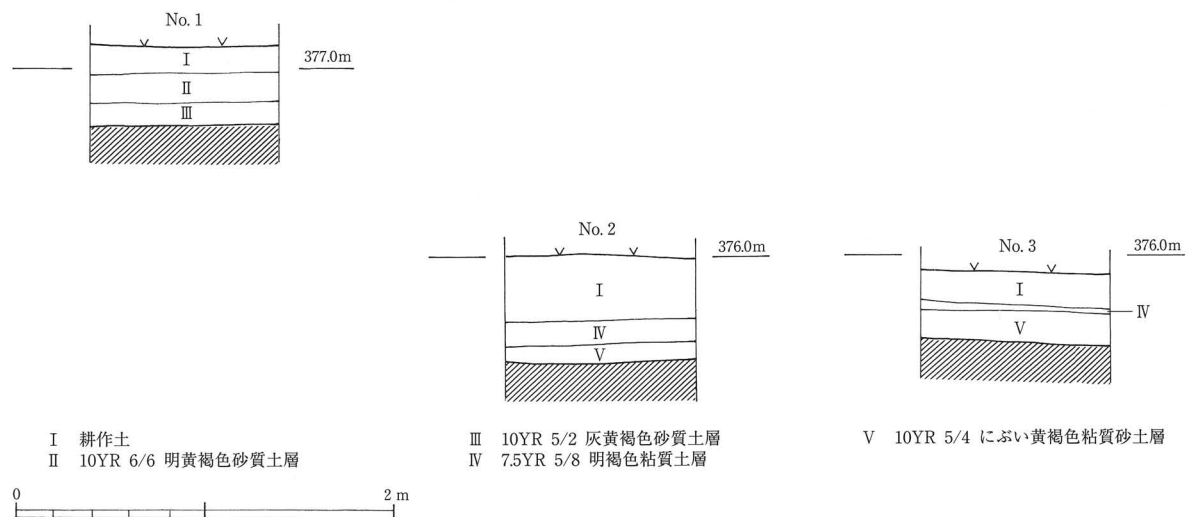
#### 1. 概要（第4図、図版1-1）

11区は、中畑南地区に属し、南の山塊から北に下る標高376m前後を測る丘陵縁辺部に広がる調査区で北西から南西方向に長い。最大長70m、最大幅25mを測る。同じ調査地区には南西側約80mに5区がある。調査区は水田造成時の削平により上下2段に分かれている。

検出した遺構は平安時代と推定される建物4棟、柱穴群、近世と推定される水田の区画溝などである。

#### 2. 基本層序（第3図、図版1-3・4・5）

前述したように調査区は水田造成時の削平によって上段と下段に分かれ、層序も上段と下段によって異なる堆積状況を示している。



第3図 11区基本層序図

以下、各層の概要を記述する。

I層 現耕作土層で層厚は、0.15mから0.4mを測る。

II層 上段のみに認められる層で、明褐色砂質土を基本とする。水田造成時の整地土と推定される。層厚0.15m前後を測る。

III層 上段のみに認められた層で、灰黄褐色砂質土を基本とする。上段の遺物包含層で、平安時代から中世にかけての遺物を若干含む。層厚0.15m前後を測る。

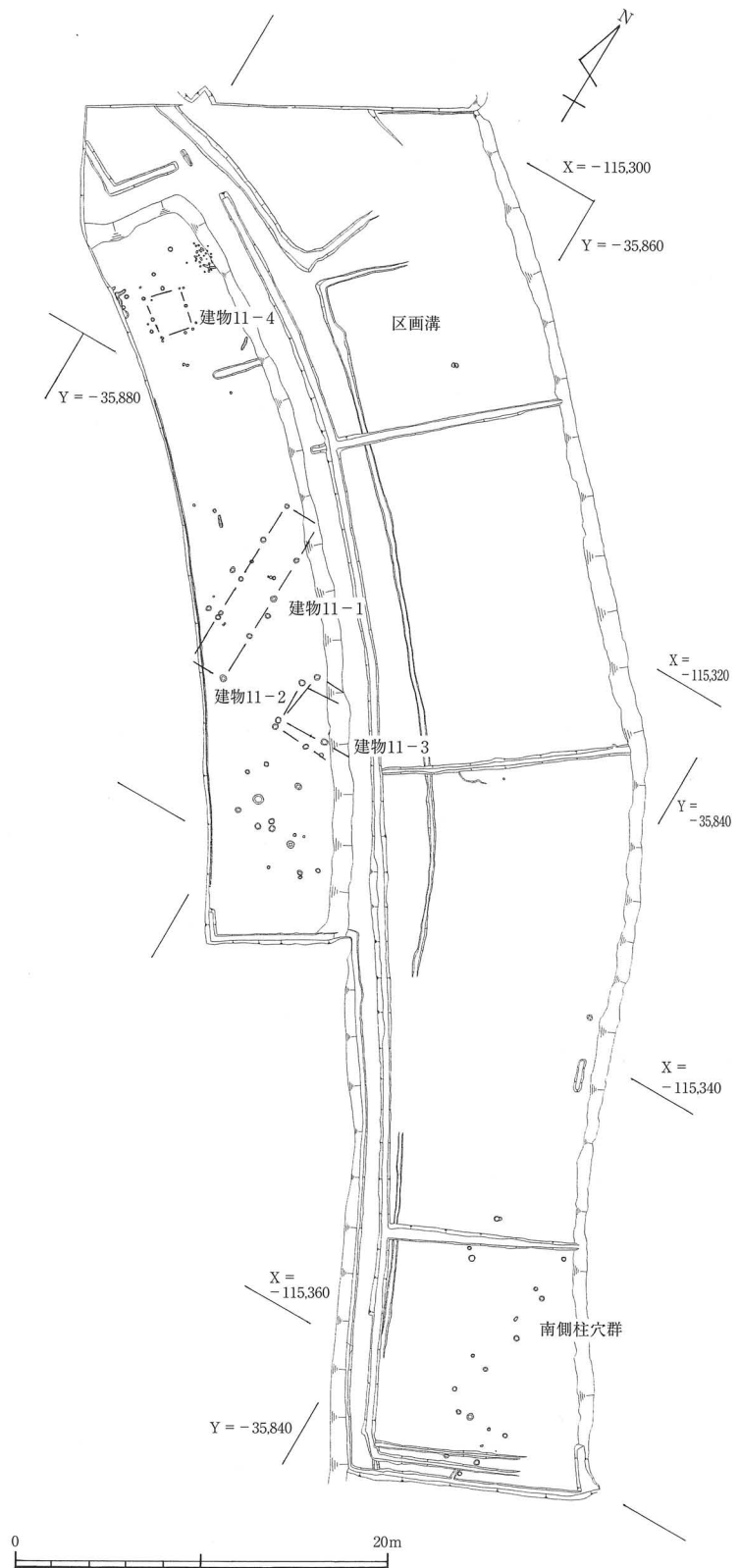
IV層 下段に認められる層で、現耕作土層の床土である。明褐色粘質土を基本とする。層厚0.05mから0.15mを測る。

V層 下段に認められる層で、にぶい黄褐色粘質砂土層を基本とする。水田造成時の整地土ないしは盛土層と推定される。平安時代から近世の遺物を含む。当該層は、山側には認められないが、谷に向かって下るに従い厚くなり、最大厚約0.3mを測る。

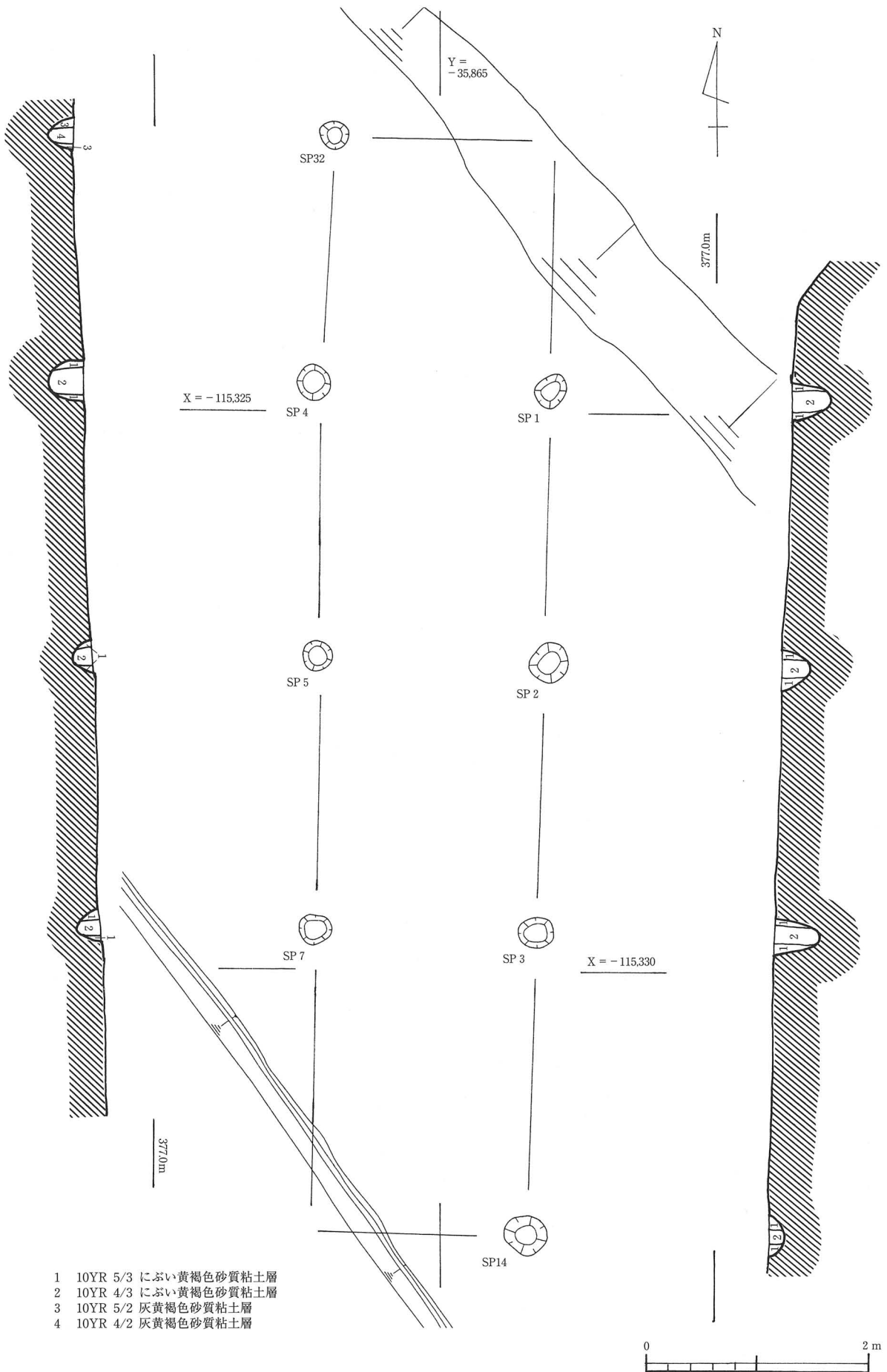
### 3. 調査の成果

#### 建物11-1 (第5図、図版2)

11区上段の中央付近、 $X = -115,326$ 、 $Y = -35,865$ 付近を中心に存在する。建物は、南側が調査区外に存在し、北側が水田造成時の削平のため欠失しているため不明である。梁間1間(約1.95m)、

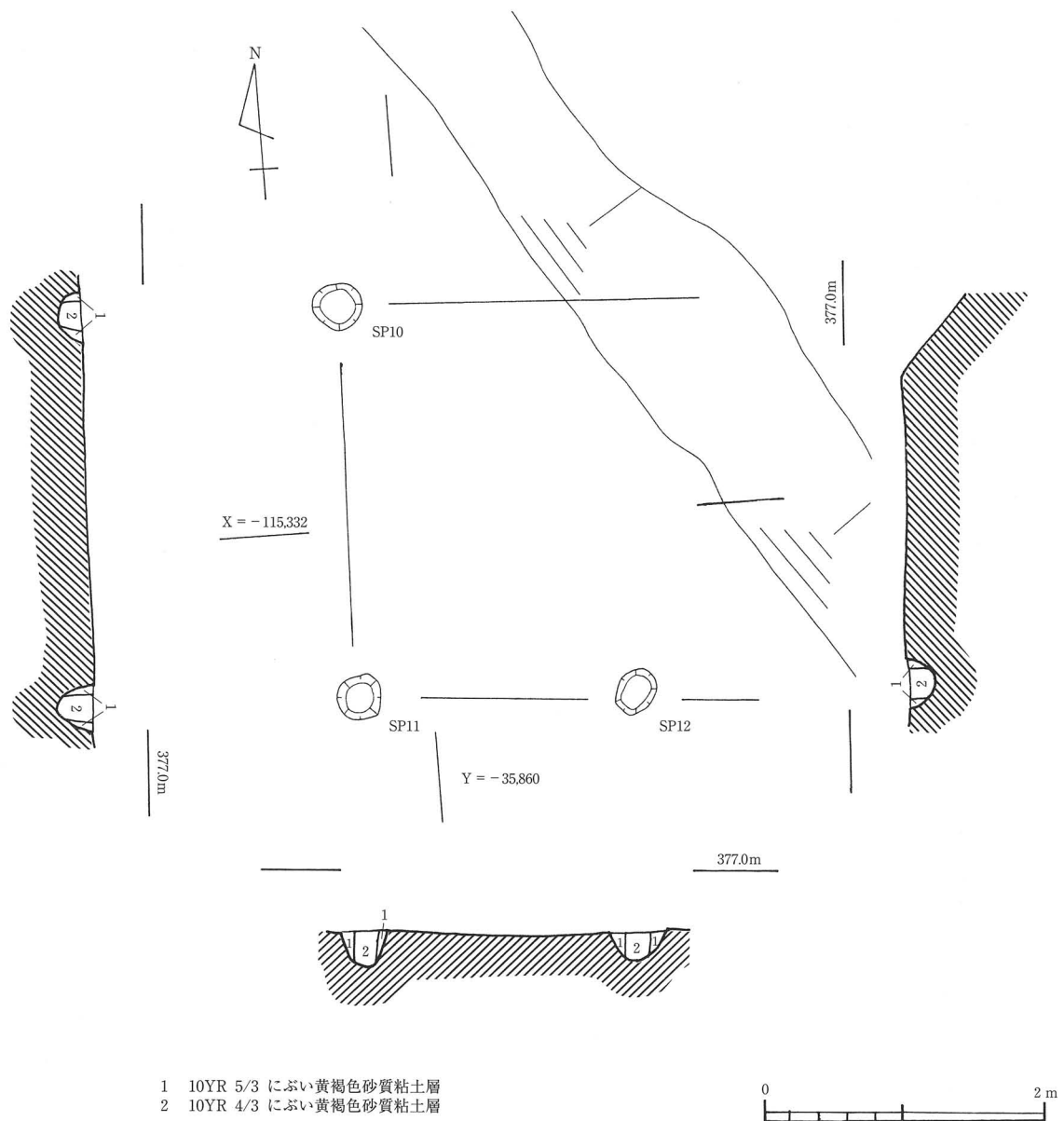


第4図 11区平面図



第5図 建物11-1平面・断面図





第6図 建物11-2平面・断面図

桁行き4間以上(約9.75m)と推定される。柱穴は円形に近い形を呈し、径0.25mから0.35mを測る。柱穴の深さは0.15mから0.4mを測る。柱痕は、径0.2m前後を測る。

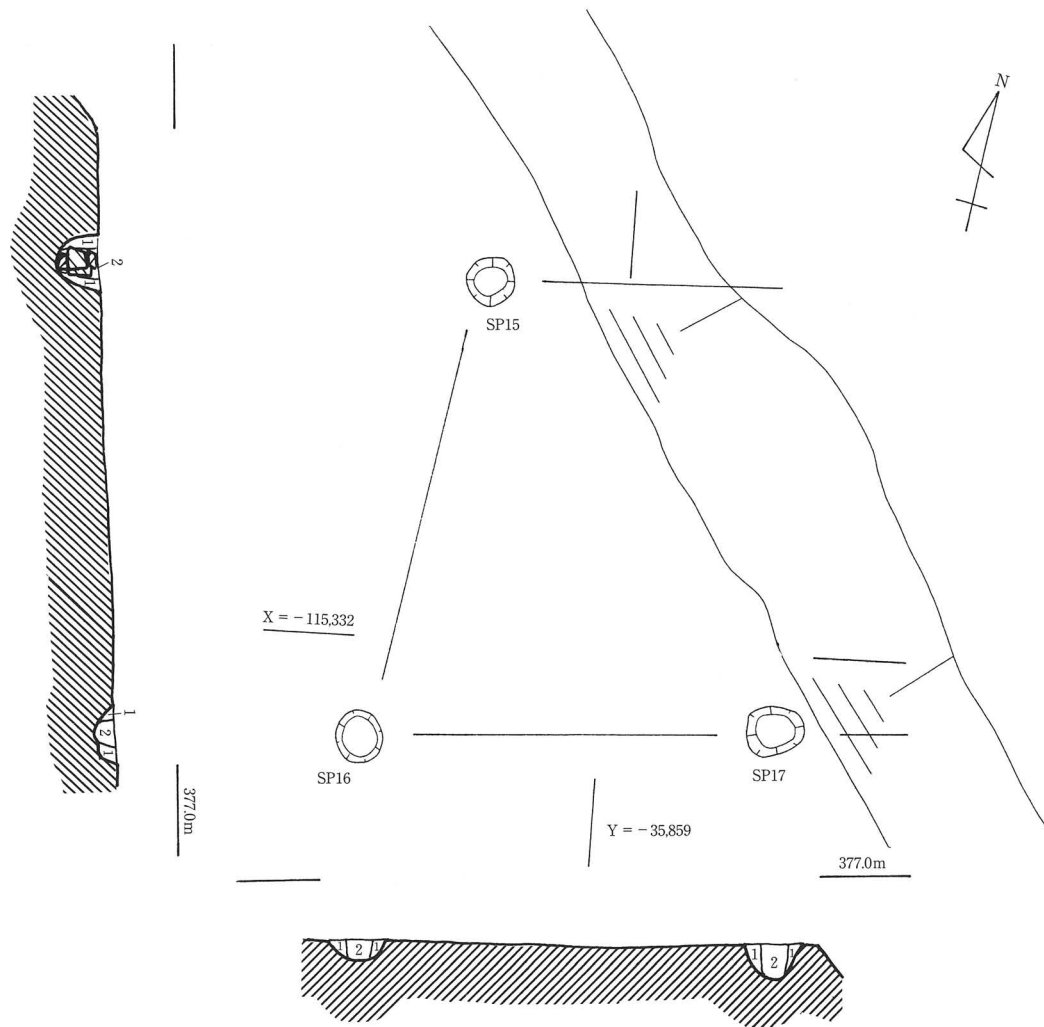
建物の時期は、遺物包含層である灰黄褐色砂質土からの出土遺物、周辺の遺構の遺物から平安時代(10世紀前半頃)と推定される。

建物11-2(第6図、図版3-1・2・3)

11区上段の南側付近、X = -115,332、Y = -35,859.5付近を中心に存在する。建物11-3とほぼ同一地点に重複して存在する。

建物の北側は、水田造成時の削平のため欠失し、柱穴3本のみを確認した。検出した建物の柱穴が少ないため、建物の方向等が不明確であるが、柱穴の位置関係から東西方向で、梁間1間(約2.8m)、桁行き1間以上(2m以上)と推定される。柱穴は円形に近い形を呈し、径0.3mか





第7図 建物11-3平面・断面図

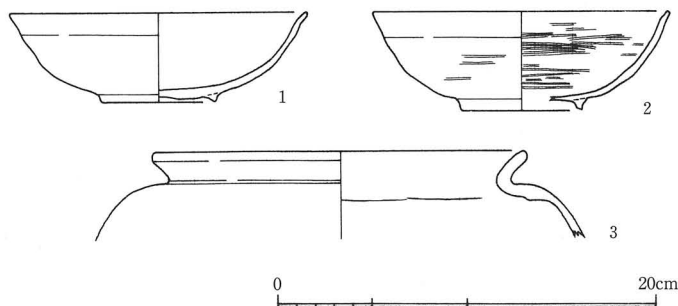
ら0.35m、深さ0.15mから0.25mを測る。

柱痕は、径0.2m前後を測る。

時期は、周辺からの出土遺物から平安時代（10世紀前半頃）と推定される。

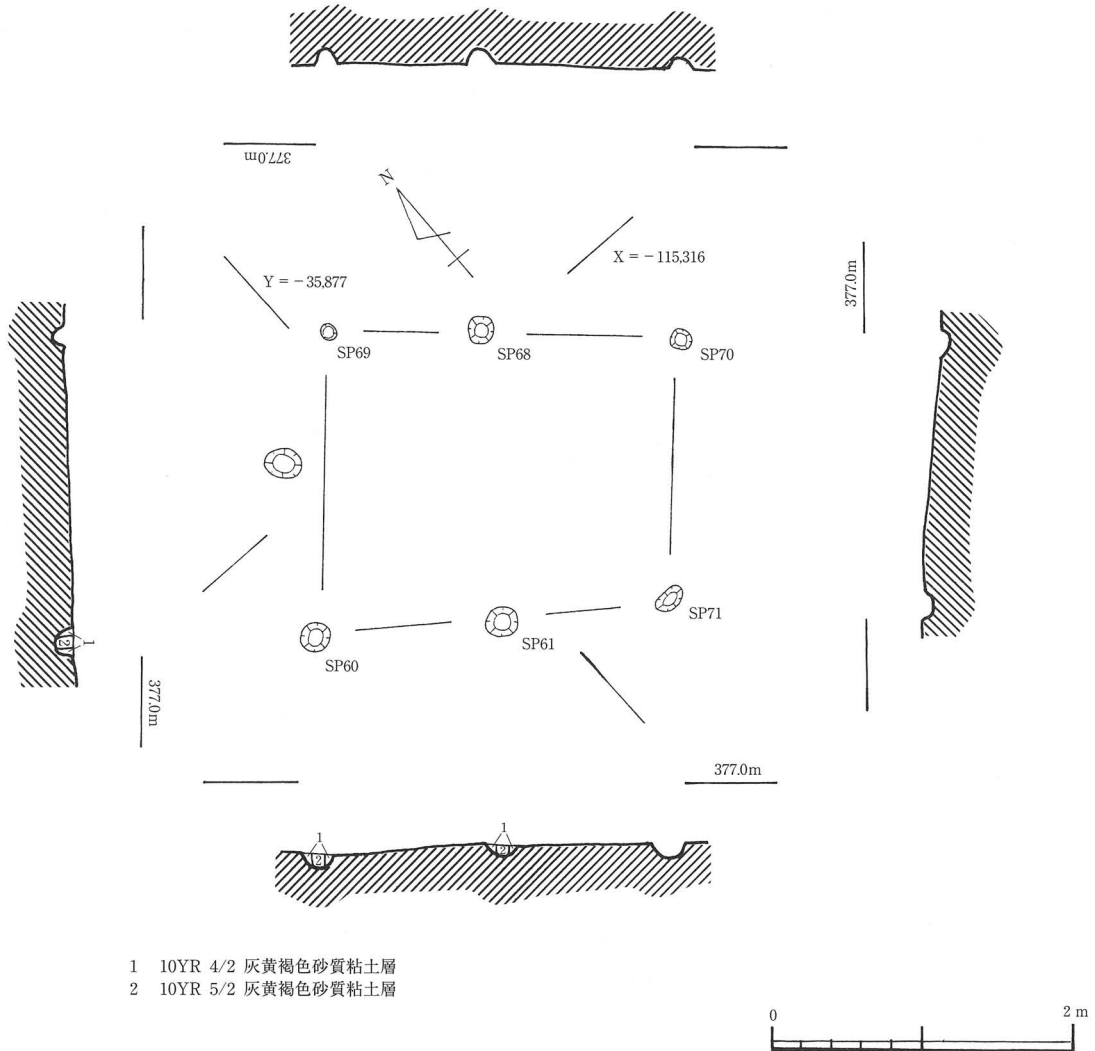
建物11-3（第7図、図版3-1・4~7）

11区上段の南側、 $X = -115.331$ 、 $Y = -35.859$ 付近を中心に存在する。建物11-2とほぼ同一地点に重複して存在する。



第8図 建物11-3 SP17出土遺物

建物の北側は、水田造成時の削平のため欠失し柱穴3本のみを確認した。そのため建物の方向等が不明確であるが、柱穴の位置関係から東西方向で、梁間1間（約3.0m）、桁行き1間以上（2.7m以上）と推定される。柱穴は円形に近い形を呈し、径0.3mから0.35mを測る。柱穴の深さ



第9図 建物11-4 平面・断面図

は0.15mから0.35mを測る。柱痕は、径0.2m前後を測る。建物のSP17の柱穴内から黒色土器、土師器甕片（第8図、図版8-1・2、9-3）が出土している。また、SP15（図版3-4・5）では柱を抜き取った後、周辺に存在する石を詰めているのが確認された。

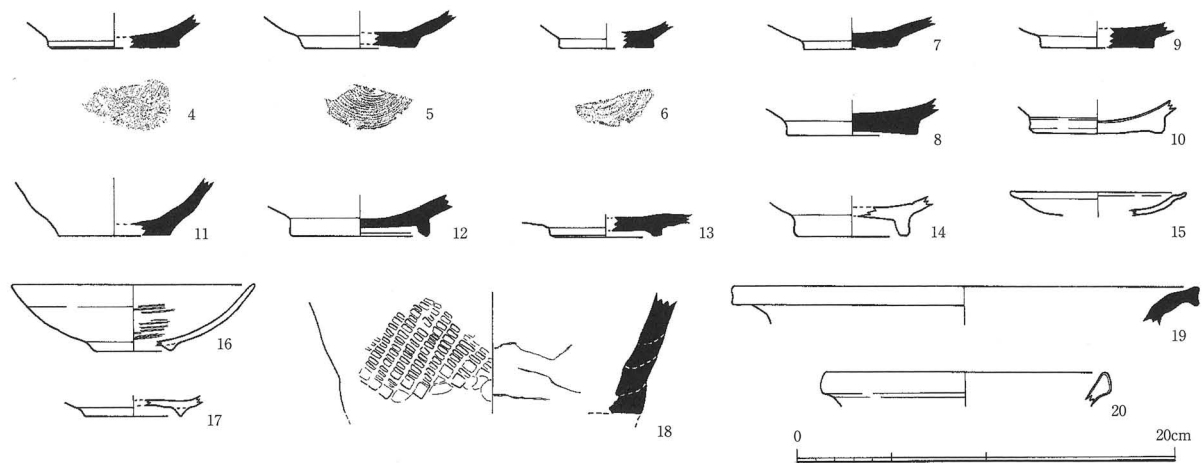
建物の時期は、柱穴内からの遺物から平安時代（10世紀前半頃）と推定される。

建物11-4（第9図、図版4-1～3）

11区上段の北側、 $X = -115,316.5$ 、 $Y = -35,876.5$ 付近を中心に存在する。梁間1間（約1.9m）、桁行き2間（約2.3m）と推定される。柱穴は円形に近い形を呈し、径0.1mから0.2m、深さは0.1mから0.15mを測る。柱痕は、径0.1m前後を測る。建物の時期は、周辺からの出土遺物から平安時代（10世紀前半頃）と推定される。

南側柱穴群11-1（第4図、図版1-2、4-6～9）

11区下段の南側、 $X = -115.358$ 、 $Y = -35.833$ 付近を中心に多数の柱穴を検出した。柱穴は、平面上では東西方向と南北方向の2方向が認められた。そのため当初、柵列の可能性があったと考えていたが、柱穴間が直線的ではなく、若干ずれて並んでいることから、現在の所、柱穴群とし



第10図 11区出土遺物 1

て扱うこととした。

柱穴は円形に近い形を呈し、径0.2mから0.4m、深さは0.1mから25mを測る。柱痕は、径0.15m前後を測る。時期は、周辺からの出土遺物から平安時代（10世紀前半頃）と推定される。

#### 区画溝（第4図、図版1-1）

11区下段の北端から南側にかけて検出した溝である。調査区の上段と下段の境から約4m付近を段下に沿って長く延びる。溝は、 $X = -115,310$ 、 $Y = -35,870$ 付近で北西側が「L」字、南東側が逆「L」字に屈曲し、溝が2ヶ所に分かれる。北西側の区画溝は、幅0.6mから0.8m、深さ0.1m前後を測り、北側の調査区外へと延びる。検出長約12mを測る。南側の区画溝は、幅0.3mから0.6m、深さ0.05m前後を測り、溝の一部は地山面の削平のため欠失している。検出長約38.0mを測る。

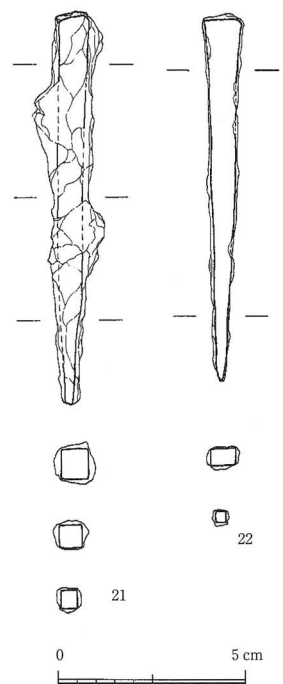
平面の状況から、現水田以前の水田の区画溝と推定される。溝内の遺物から近世と推定される。

#### 出土遺物（第10・11図、図版9）

11区から出土した遺物は、調査面積に比して極めて少なく、調査区上段の柱穴（SP17）以外は、小片が多い。遺物は、平安時代初期と推定される須恵器が多く出土し、杯身底部に糸切痕が認められるものが多い。

中世の遺物は今回調査した他の調査区に比べて少なく、瓦器、青磁、白磁などが少量出土しているのみである。

また、遺構に伴わないため時期は不明であるが鉄釘が出土している。釘の断面が四角形であることから中世以前、出土した遺物が平安時代のものが多いことから平安時代である可能性が高い。



第11図 11区  
出土遺物 2

### 第3節 12区の調査

#### 1. 概要（第13図、図版5-1）

12区は、中畑東地区に属し、東の山塊から北に下る標高376.7m前後を測る丘陵縁辺部に広がる調査区で南北方向に細長い。最大長132m、最大幅12mを測る。同じ調査地区には南側に13・14区、南西側には15区がある。調査区は上段の丘陵斜面部と下段の埋積谷部とに分かれている。

12区で検出した遺構は、建物などの顕著なものは少なく、埋積谷部では、中世と推定される焼土坑、溝、杭跡群など、上段の斜面部では近世と推定される溝、土坑などである。

#### 2. 基本層序（第12図、図版5-2・3）

前述したように調査区は、上段の丘陵斜面部と下段の埋積谷部に分かれる。層序も上段と下段によって異なる堆積状況を示している。

以下、各層の概要を記述する。

I層 現耕作土層で層厚は、0.15mから0.4mを測る。

II層 現耕作土の床土層で、にぶい黄褐色砂質土を基本とする。層厚0.15m前後を測る。

III層 下段の埋積谷部に認められる層で、最大4層に分けることができる。粘質土を基本とするが色調は異なる。層は、山側では薄く堆積し、下るに従い厚く堆積する。出土した遺物は、平安時代から中世にかけてのものが大半を占める。III層は、層の堆積状況から中世以降に堆積したものと推定される。

#### 3. 調査の成果

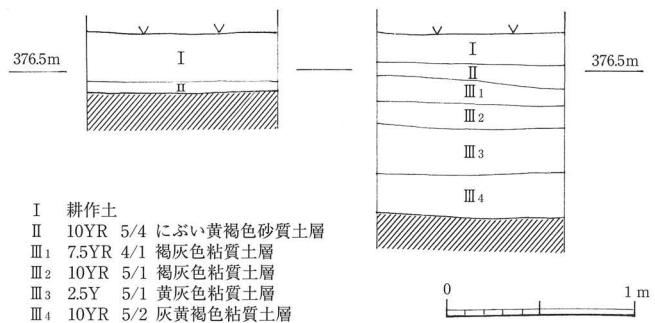
##### 土坑12-3（第14図、図版5-4・5）

埋積谷部の中央付近  $X = -115,331.5$ 、 $Y = -35,621.5$ 付近を中心とする。土坑は平面形で円形に近く径0.9m前後を測る。土坑は地山面が削平を受けていたものと推定され、深さ0.05m前後と浅く、底面はほぼフラットである。土坑の表面は焼けており、にぶい褐色を呈する。土坑の埋土は、黒褐色を呈する粘土の炭混じり層である。土坑内からは全く遺物は出土しなかった。

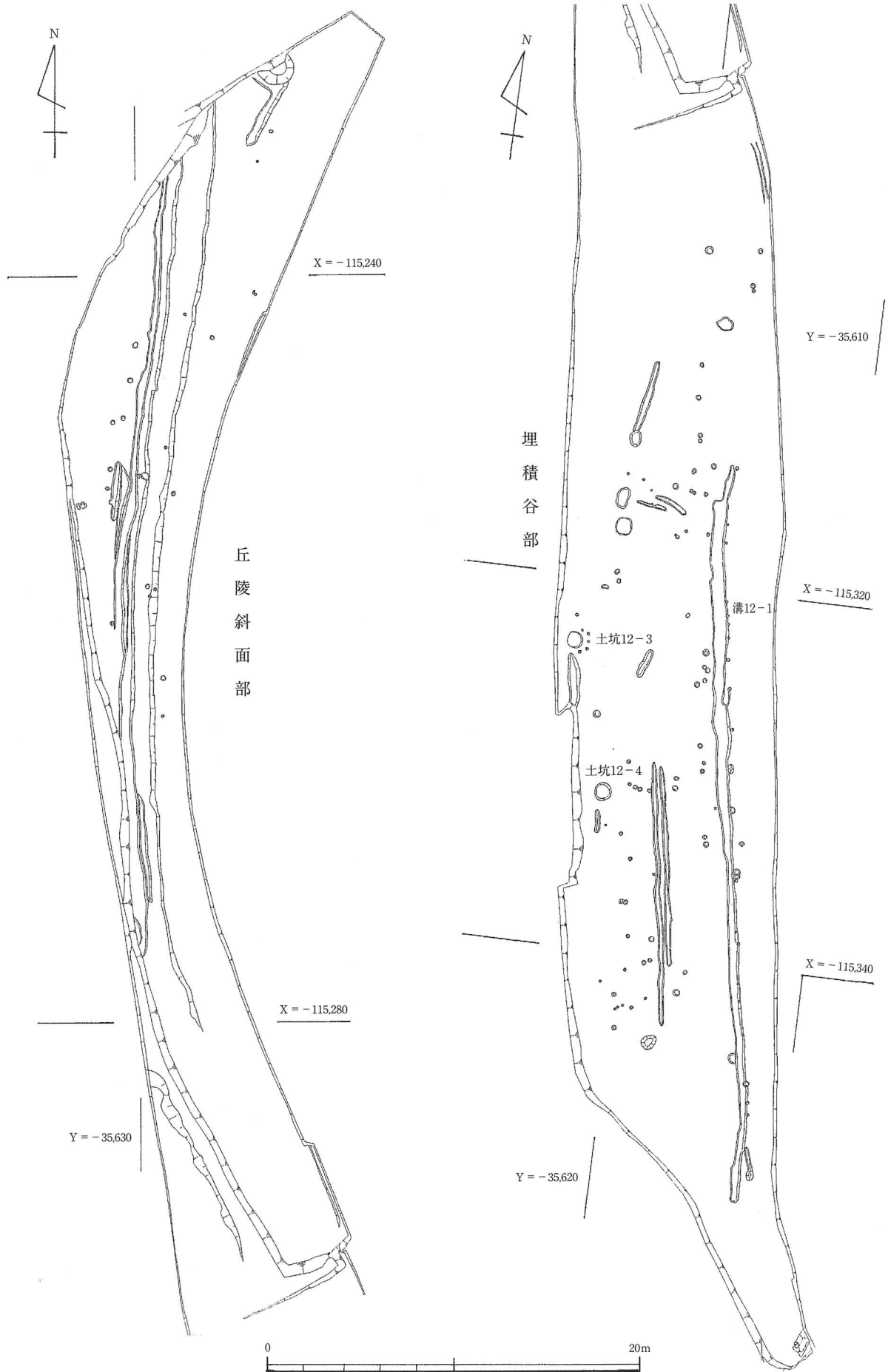
土坑内で火を使用する作業が行われたことは、否定できないが用途は不明である。

##### 土坑12-4（第14図）

埋積谷部の中央付近  $X = -115,323$ 、 $Y = -35,624.6$ 付近を中心とする。土坑は平面形で円形に近く径0.8m前後を測る。土坑は地山面が削平を受けていたものと推定され、深さ0.05m前後と浅く、底面はほぼフラットである。土坑の表面は焼けており、にぶい褐色を呈する。土坑の埋土は、黒色、灰黄褐色、にぶい黄褐色を呈する粘質土の炭混じり層であ



第12図 12区基本層序図



第13図 12区平面図

る。土坑内からは全く遺物は出土しなかった。

土坑内で火を使用する作業が行われたことは、否定できないが用途は不明である。

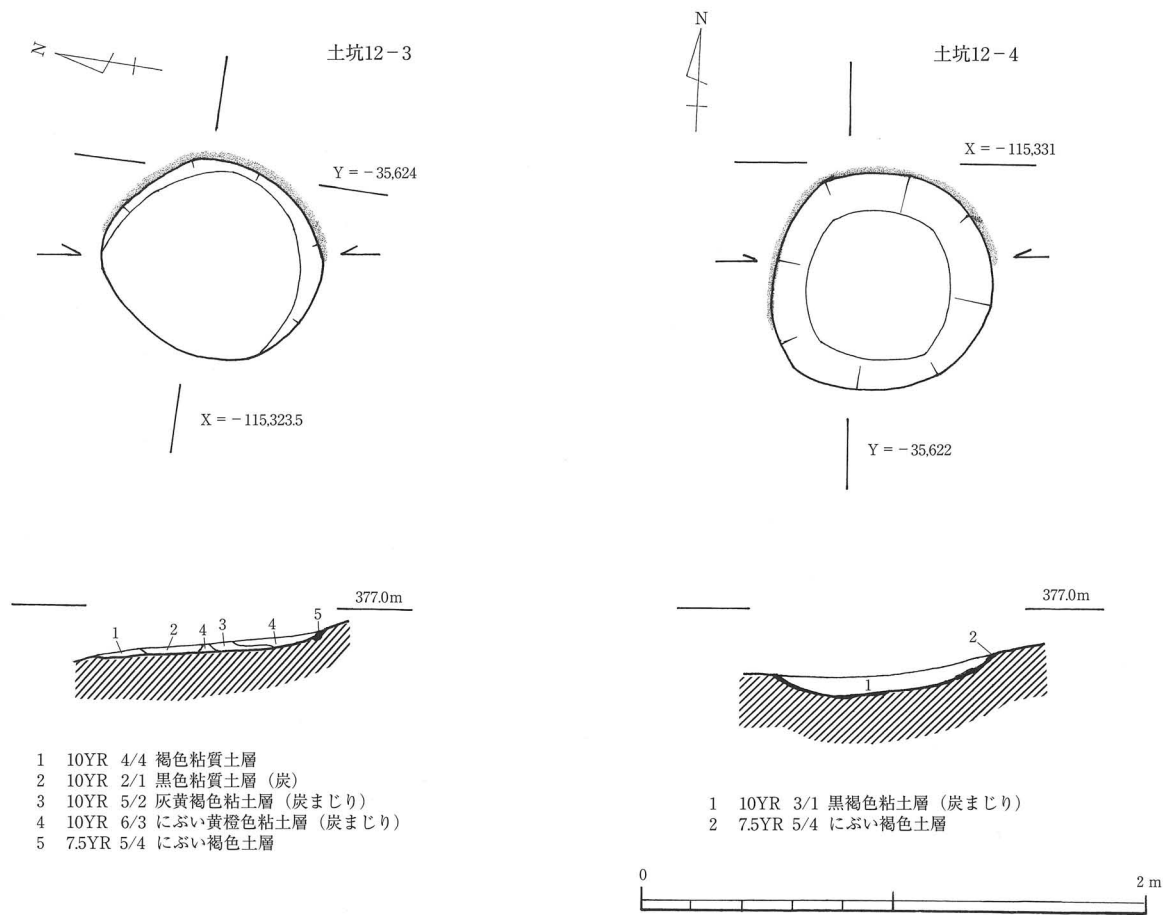
溝12-1 (第13図、図版5-1)

埋積谷部の南側  $X = -115,313$ 、 $Y = -35,617$  から  $X = -115,352$ 、 $Y = -35,612$  で検出した。溝は埋積谷部の山側を南北方向に直線的に延び検出長約39.7m、幅約0.5から0.8m、深さ約0.1m前後を測る。溝の埋土は、黒褐色粘質土である。溝内から遺物は出土しなかったが、周辺の出土遺物から中世と推定される。また、溝の周辺には、他の地点よりも多く、溝に沿って径0.05m前後の杭跡が検出されている。杭跡の中には、杭が残存しているものも存在する。

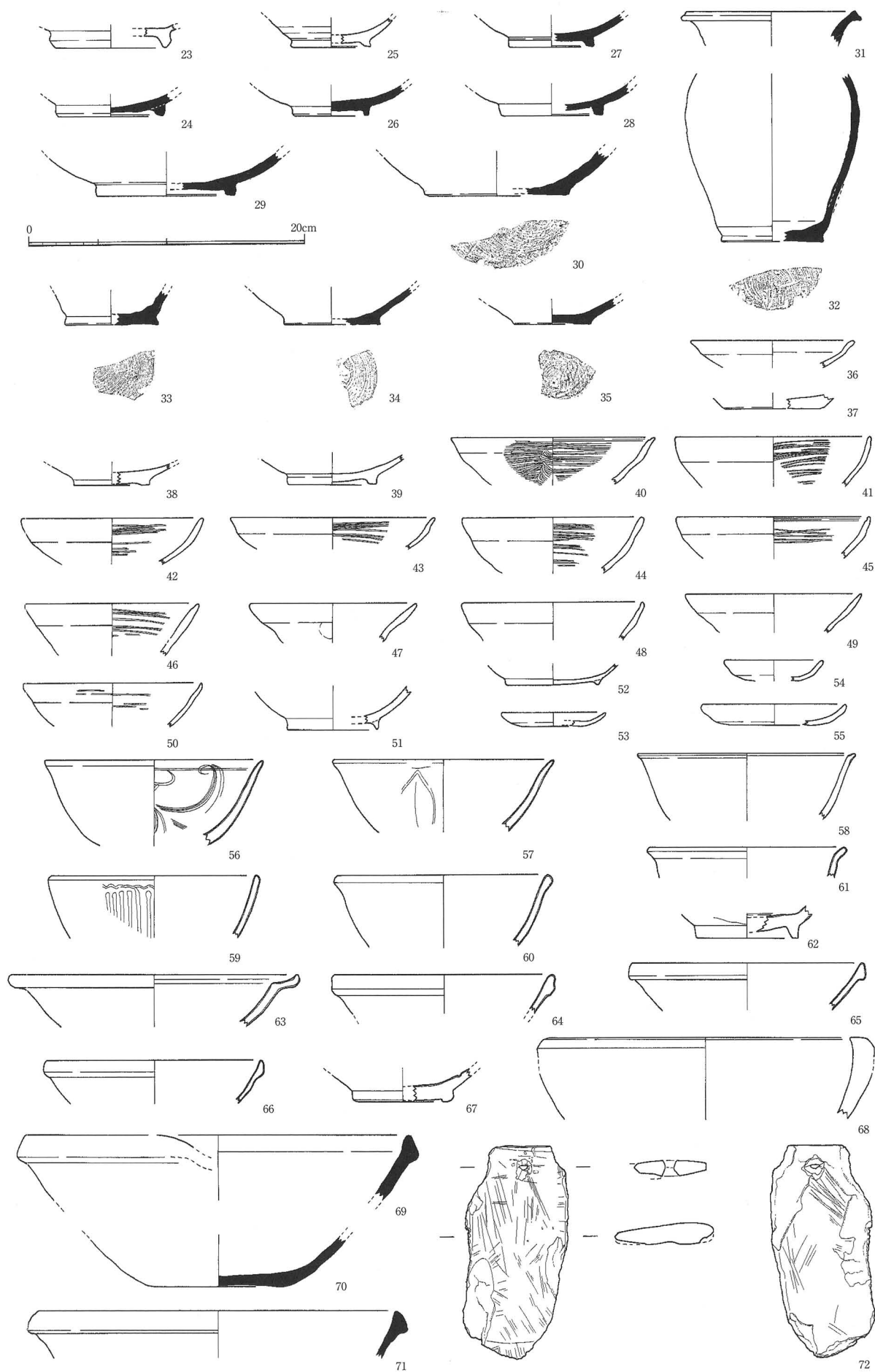
溝および杭跡の用途は不明だが、これらはセットになるものと推定される。

出土遺物 (第15図、図版9)

出土した遺物の大半は、埋積谷部のⅢ層中より出土し、丘陵斜面部からは極めて少なく、近世のものが大半を占める。出土した遺物は、須恵器、緑釉陶器、土師器、瓦器、青磁、白磁、石製品などで、注目される遺物として石鍋 (68) がある。出土した遺物の時期は、平安時代から中世にかけてのものが大半である。



第14図 12区焼土坑平面・断面図



第15图 12区出土遗物

## 第4節 13・14区の調査

1. 概要（第16図、図版5-6、6-1、7-1・2）

13・14区は、中畑東地区に属し、東の山塊から北に下る標高376m前後を測る丘陵縁辺部に広がる調査区である。南北方向に長い。調査当初は、13・14区は別々の調査区であったが、調査区が隣接していることと、両調査区とも調査面積が少ないため、同じ項として扱うこととした。調査区は、最大長さ51m、最大幅11.5mを測る。同じ調査地区には北側に接して12区、西側に約20m離れて15区がある。

13・14区で検出した遺構は、炉跡2基、溝2本、柱穴多数、落ち込み1基、風倒木痕1箇所などである。

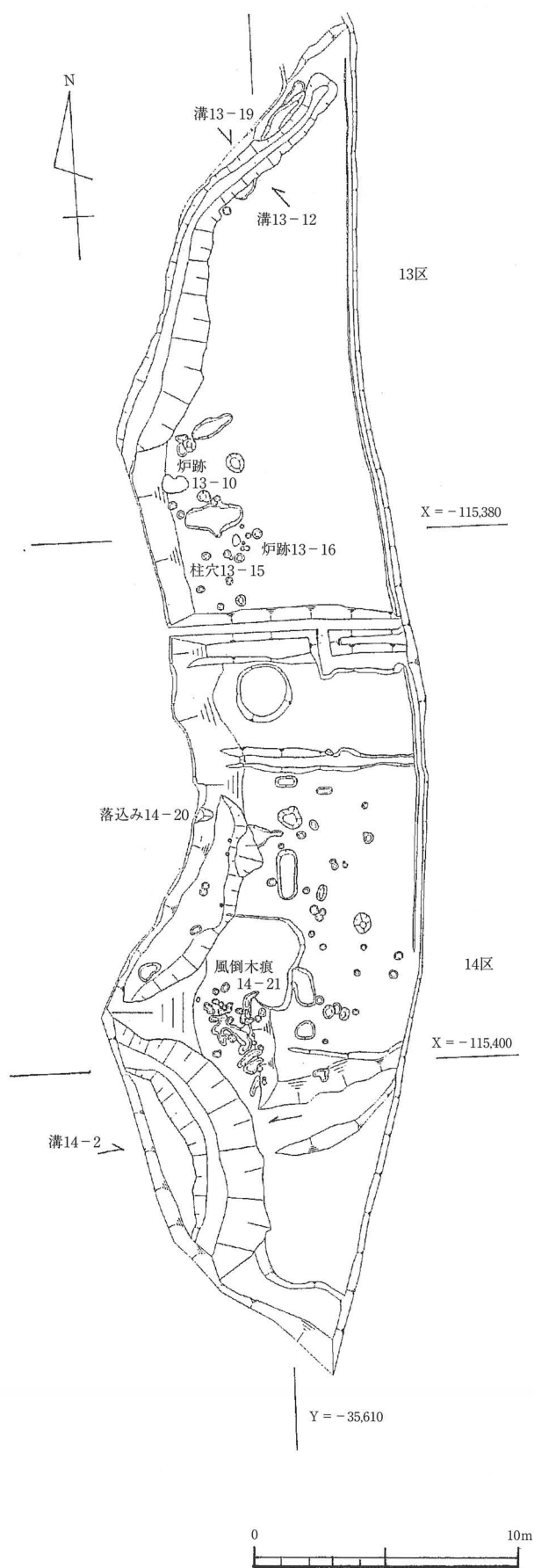
1. 基本層序（第17図、図版6-3・4）

13・14区とも、近世と推定される水田造成時に削平を受けたものと推定され、堆積層がほとんど検出されず、耕作土層直下は地山であった。僅かに斜面側に若干堆積層が存在した。

以下、各層の概要を記述する。

I層 現耕作土層で層厚は、0.15mから0.4mを測る。

II層 にぶい黄褐色粘質土ないしは灰黄褐色粘質土を基本とする。調査区の斜面側のみに堆積する。当調査区の遺物包含層で平安時代から中世にかけての遺物を含む。層厚最大0.15m前後を測る。



第16図 13-14区平面図



### 3. 調査の成果

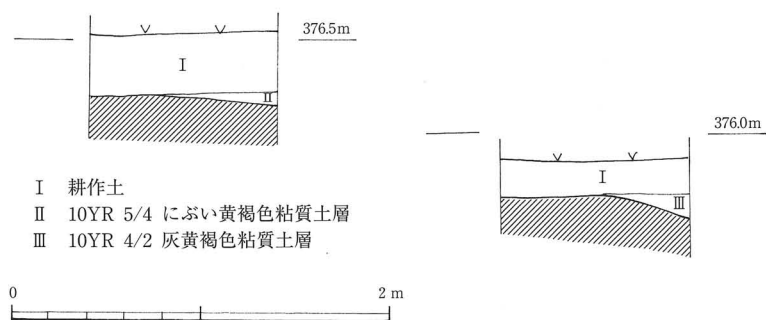
炉跡（第18図、図版6-1）

炉跡13-10 13区の中央より南西斜面側  $X = -115,378$ 、 $Y = -35,610.8$ 付近に存在する。この地点で火を使った作業が行われたものと推定され、楕円形状に地山の表面が焼けており、明赤褐色を呈する。長辺約1.0m、短辺約0.6m、焼土の最大厚さ0.15mを測る。

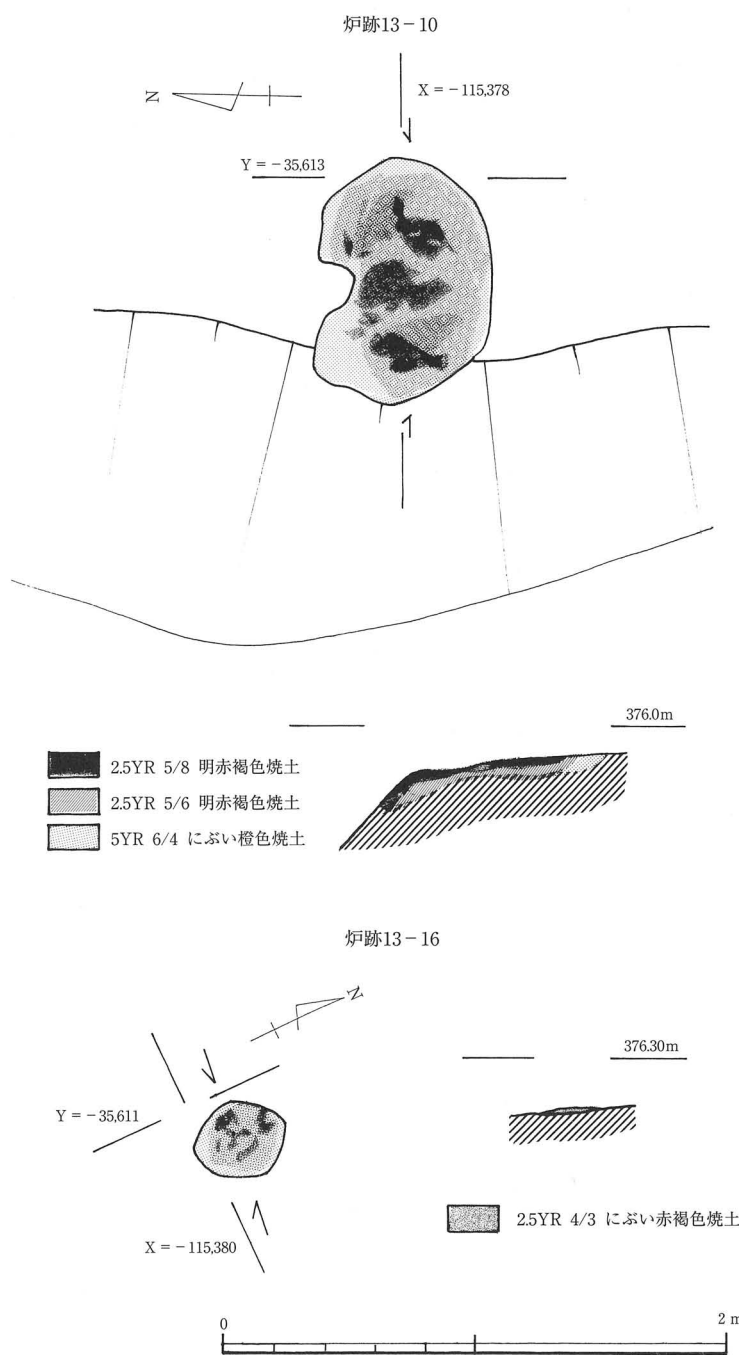
炉跡13-16 13区の中央より南側  $X = -115,379.9$ 、 $Y = -35,624.4$ 付近に存在する。この地点で火を使った作業が行われたものと推定され、円形状に地山の表面が焼けており、にぶい赤褐色を呈する。長辺約0.4m、短辺約0.3m、焼土の最大厚さ0.03mを測る。

検出した2基の炉跡の時期は、遺構内から遺物が出土しなかったため不明であるが、周辺に存在する柱穴13-15より土器と共に鋳滓と推定される鉄片が極少量出土していることから平安時代のものと推定される。

柱穴13-15（第19図、図版6-2） 13区の中央より南側  $X = -115,380.5$ 、 $Y = -35,611.5$ 付近に存在する。柱穴は円形に近い形を呈し、径約0.5m、深さ約0.4mを測る。柱穴底部付近から黒色土器碗、土



第17図 13・14区基本層序図



第18図 13区炉跡平面・断面図

師器甕片（第20図、図版8-1・2、9-73）、鉾滓と推定される鉄片が極少量出土している。柱穴13-15の周辺には他にも柱穴を検出したが、建物を検出するには至らなかった。

風倒木痕14-21（第16図、図版7-2）

14区の中央の南側  $X = -115,388$ 、 $Y = -35,611.8$  付近で検出した。最大長4.5m、最大幅2.4mの範囲に多数の柱穴状の落ち込み、溝状の遺構を検出した。柱穴状の落ち込み溝状の遺構とも掘り方が検出面より斜めに入り込むものが多いことから風倒木痕の可能性が高いと判断した。

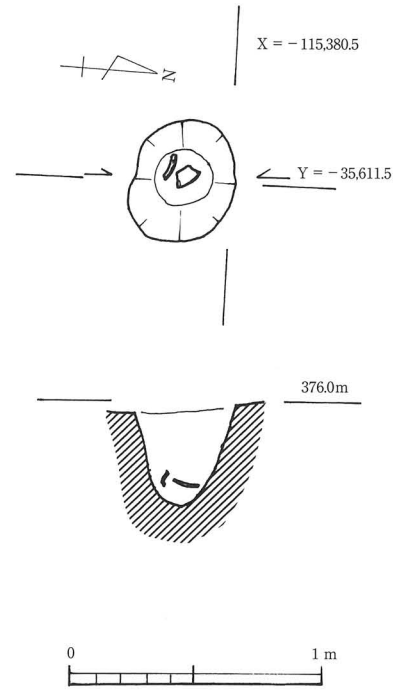
落ち込み内から多数の中世の遺物（第21図、図版9）が出土している。出土した遺物の時期は、14世紀前半代と推定される。

溝13-12（第16・22図、図版5-6）

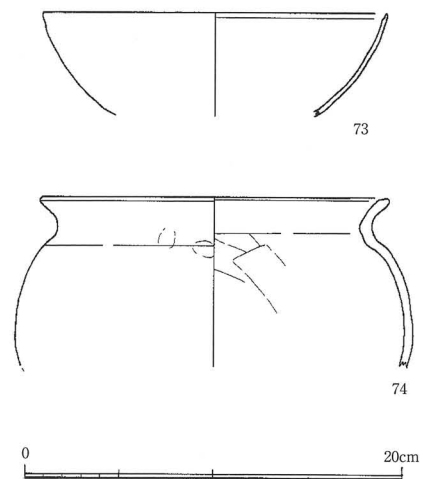
13区の北東端  $X = -115,363$ 、 $Y = -35,607$  付近から始まり13区の斜面下部に沿って延びる。 $X = -115,377$ 、 $Y = -35,615.2$  付近から西の調査区外へと延びる。溝の断面は、「V」字形に近く、検出長約17m、幅約0.8m、斜面上面からの深さ約0.6m、斜面下からの深さ約0.3mを測る。

溝は掘り直しが行われたものと推定され、北東端の  $X = -115,363.2$ 、 $Y = -35,608$  から  $X = -115,365.2$ 、 $Y = -35,609.4$  付近の間は、溝13-19と共に2本の溝が平行して並ぶ。土層断面観察の結果、溝13-12が新しい。溝13-19は検出長約2.6m、幅約0.6m、斜面下からの深さ約0.07mを測る。

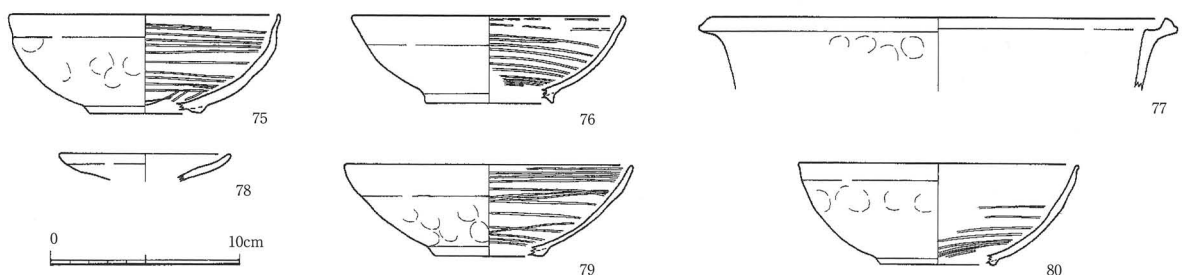
出土した遺物は、極めて少なく瓦器碗の小片が出土したのみであった。溝の時期は出土遺物から中世と推定されるが、遺物が小片であるためはっきりとした年代までは不明である。



第19図 柱穴13-15遺物出土状況図



第20図 柱穴13-15出土遺物



第21図 風倒木痕14-21出土遺物

溝の用途は、調査当初は丘陵の上部と下部を分ける地点に沿って存在することから、屋敷地を区画する溝と考えていた。しかし、丘陵上部に溝の時期と推定される中世の遺構がほとんど検出されなかったこと、13区の平坦面の面積が、屋敷地には小面積であること、また、南側に存在する14区においては、中世の遺物は、攪乱層ないしは盛土層から多量に出土するものの、顕著な遺構は検出されなかったことから、現在の所、溝の用途は不明である。

溝14-2 (第16・23図、図版7-2)

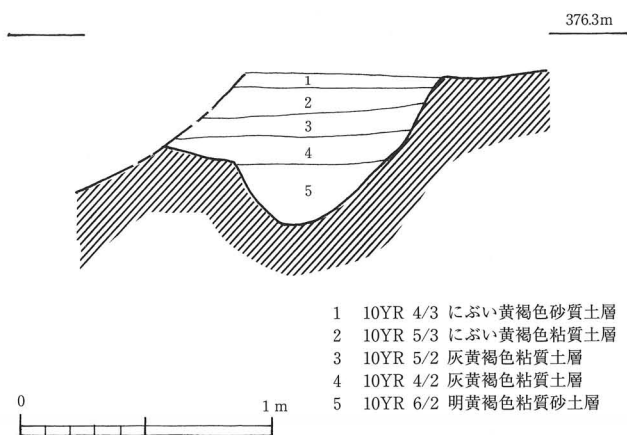
14区の中央より南側の斜面下付近で検出した。北側はX = -115,399、Y = -35,616.4付近から調査区外、南側はX = -115,406.8、Y = -35,613.2付近を斜面に沿って円弧状に巡る。溝の断面は「U」字形に近く、検出長9.5m、幅約2.6m、斜面上面からの深さ約1.9m、斜面下からの深さ約0.25mを測る。

溝内から出土した遺物は、近世のものが大半を占める。これらから溝の時期は、近世で18世紀前後と推定される。

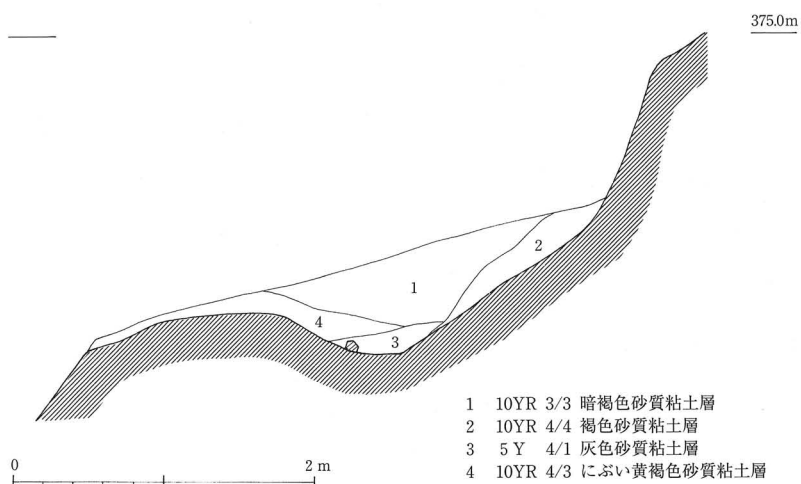
落ち込み14-20 (第16図)

14区の中央より北側の斜面下部 X = -115,390.5、Y = -35,613付近で検出した。検出状況から、斜面上に水の流れによって出来た落ち込みと推定される。落ち込みの下部は、調査区外に存在する。検出長約0.6m、幅約0.65m、最大深さ0.25mを測る。

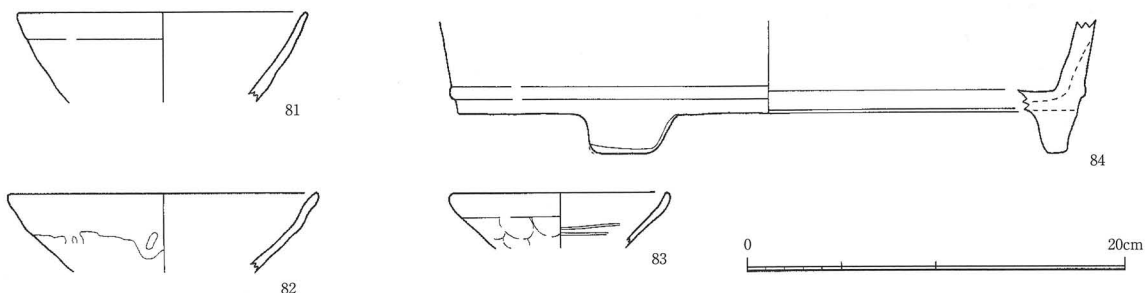
落ち込み内には、瓦器碗、瓦器小皿、土師器皿、土師器小皿、土師器羽釜、青磁碗、白磁碗、須恵器甕などの、多量の中世の遺物(第25図、図版8・9)が出土した。出土



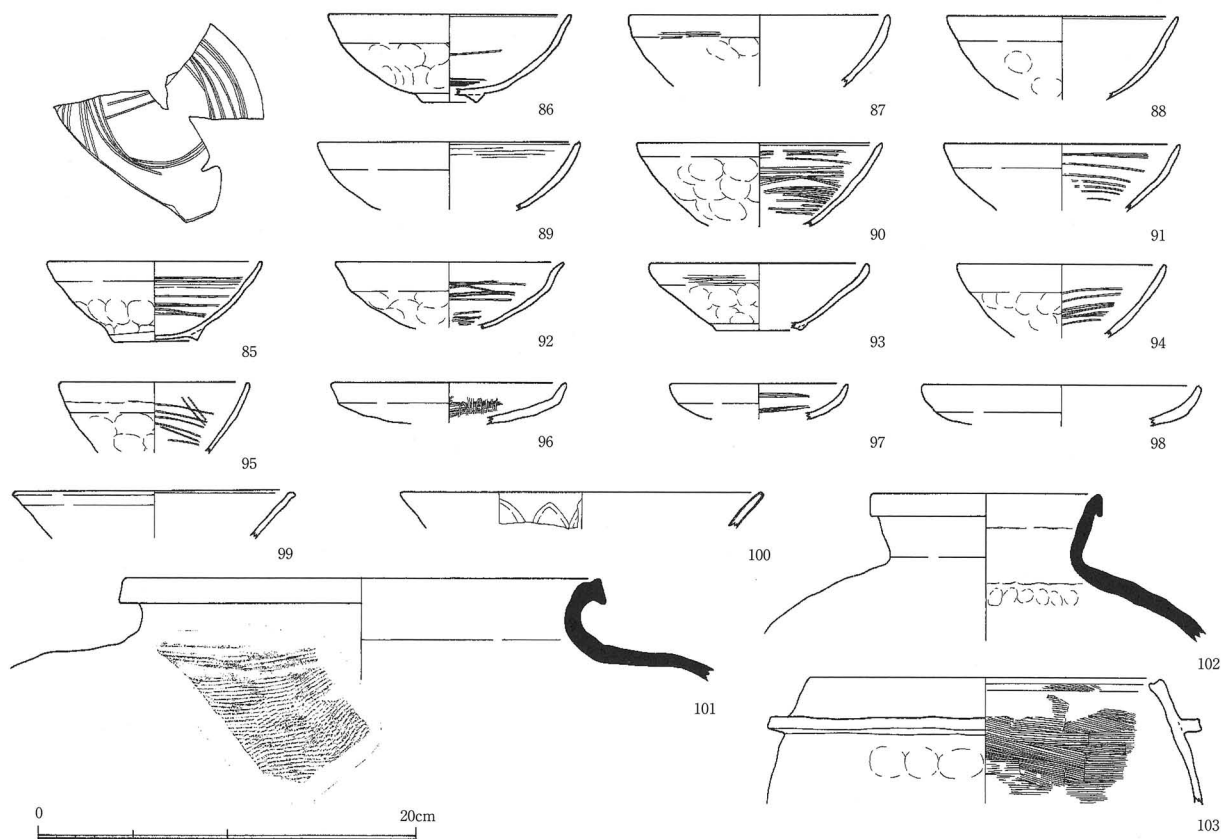
第22図 溝13-12断面図



第23図 溝14-2 断面図



第24図 溝14-2 出土遺物



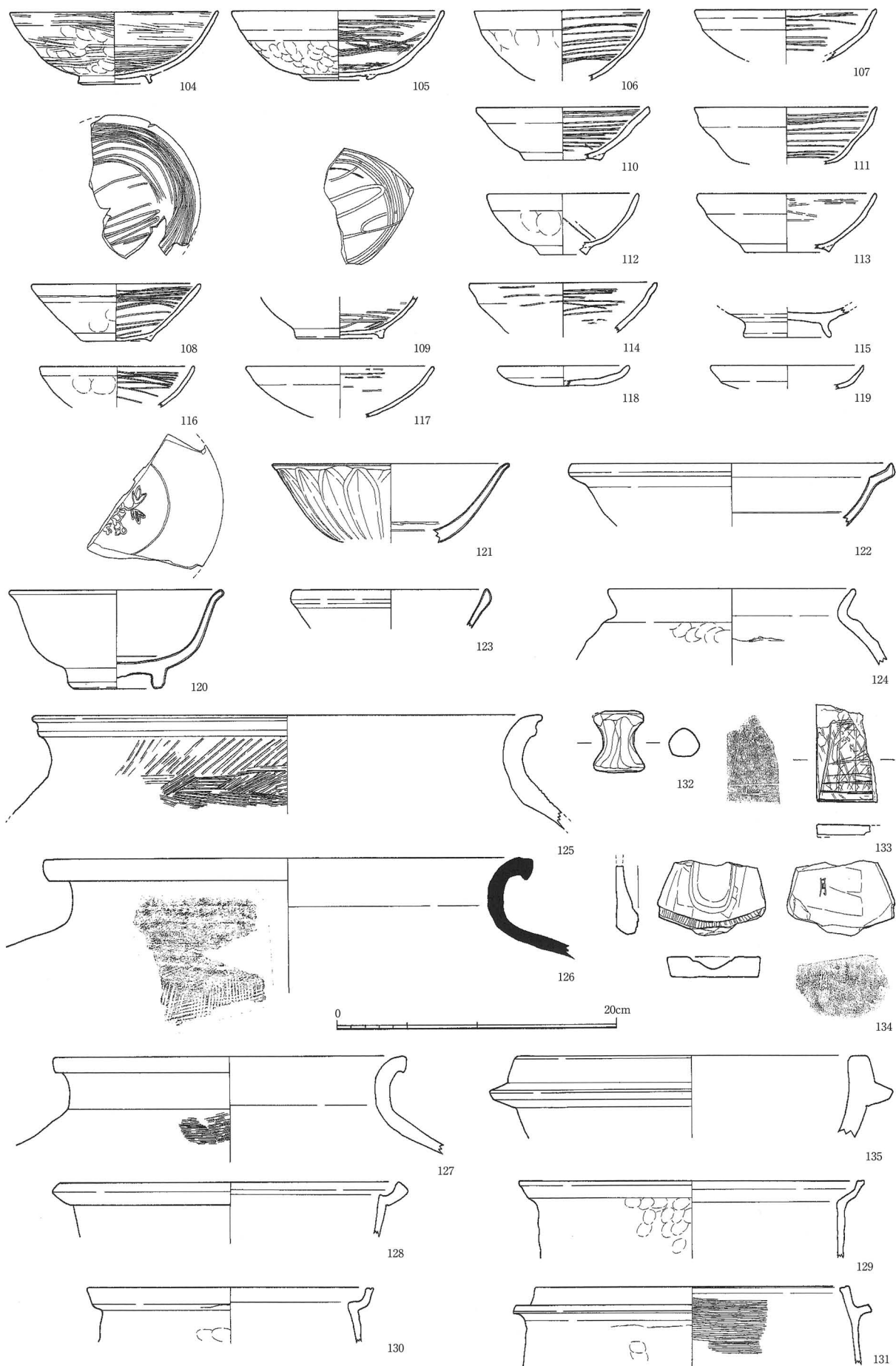
第25図 落込み14-20出土遺物

した遺物は、14世紀前半代のものが大半を占める。

出土遺物（第26図、図版8・9・10）

13・14区から出土した遺物の大半は、14区の西斜面の変換点から斜面にかけて存在する近世の水田造成時の盛土層内から多量に出土し、平坦面からのものは極めて少ない。出土した遺物は、瓦器椀、土師器小皿、青磁碗、青磁鉢、白磁碗、土師器甕、須恵器甕、瓦質羽釜、土錘、硯、石鍋などである。時期は中世で、大半は14世紀前半と推定されるが、若干12世紀後半から13世紀初頭のものが見受けられる（104・105）。硯（134）の中には、裏面に「月」の線刻が認められるものもある。また、石鍋（135）も出土している。

これら盛土層から出土した多量の遺物は、13・14区では、中世の顕著な遺構は検出されなかったこと、耕作土下の盛土層中には、焼土が多量に含まれていたことから、調査区上方に存在する丘陵斜面上現在の集落上に、14世紀前半と推定される屋敷跡が存在する可能性がある。その屋敷跡は、火事によって焼失し、その後、その地点が片付けられ、この周辺に運び込まれたものと推察される。



第26图 14区出土遗物

## 第5節 15区の調査

### 1. 概要 (第27図、図版7-3)

15区は、中畑東地区に属し、東の山塊から北に下る標高373.7m前後を測る丘陵縁辺部の下部に広がり南北方向に長い調査区である。調査区は、最大長さ62m、最大幅13mを測る。同じ調査地区には東北側に12区、東南側に13・14区がある。15区は、堆積層除去後の検出面の地形は、東の丘陵から西に下る斜面となっており、標高差約2.2mを測る。

15区で検出した遺構は、全くなかったことから、中畑東地区における遺跡端に当たっているものと推定される。また、出土した遺物も少量であった。

### 2. 基本層序 (第28図)

15区は、丘陵斜面縁辺部付近に立地しているため、土砂の堆積状況は、山側では薄く堆積し、下るに従い厚い。

以下、各層の概要を記述する。

I層 現耕作土層で、層厚は0.2m前後を測る。

II層 暗灰黄色砂質土を基本とする。当調査区の床土層である。層厚は0.1m前後を測る。

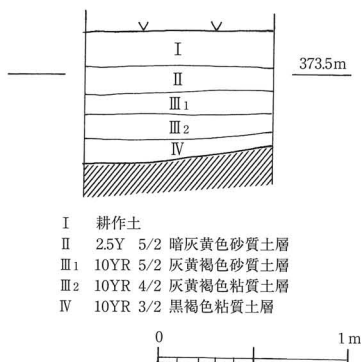
III層 灰黄褐色の砂質土ないしは粘質土を基本とし、水田造成以前の堆積層と推定される。土層の質の違いにより2層に分かれる。層厚はIII<sub>1</sub>層が0.1m、III<sub>2</sub>層が0.15m前後を測る。

IV層 黒褐色粘質土を基本とし、調査区の斜面下部に堆積している。堆積状況から中世と推定される遺物包含層と推定されるが、遺物の量は極めて少ない。層厚は0.1m前後を測る。

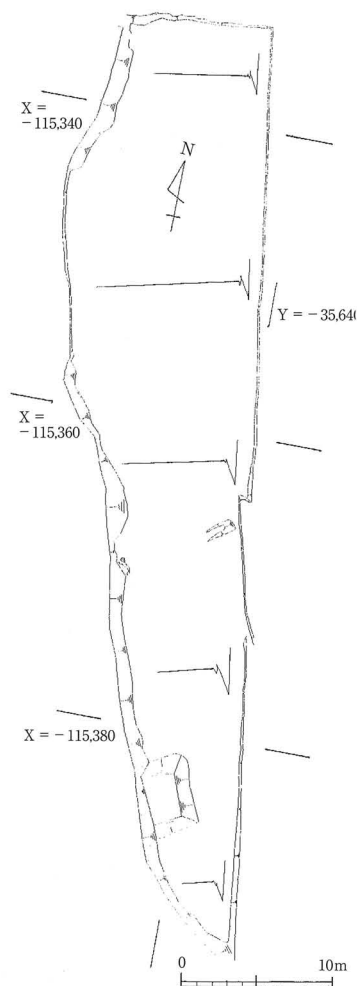
### 3. 出土遺物 (第29図、図版10)

15区から出土した遺物は、少量で図化できるものは少ない。

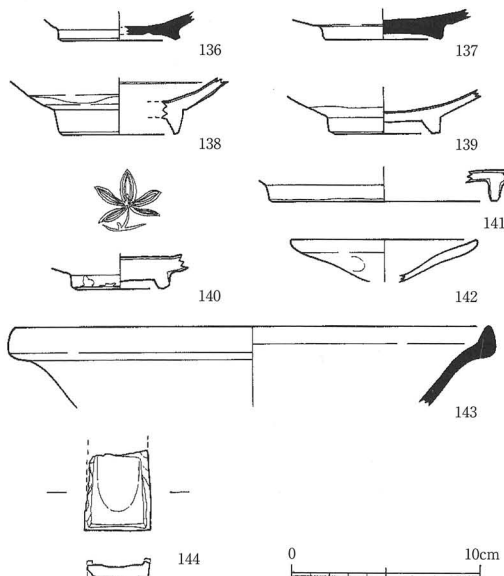
遺物は平安初期から中世のものが大半を占める。



第28図 15区基本層序図



第27図 15区平面図



第29図 15区出土遺物

### 第3章 まとめ

中畑を含めた周辺の田能、二料、杉生、出灰などのいくつかの山間小盆地によって構成された檜田と呼ばれる地域には、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての文献が数多く残存し、これらの時代の研究をする上において重要な地位を占め、歴史的にみて著名な地域であるといえる。

特に平安時代末期の貞応2年（1224）に書かれた檜船神社に伝わる棟札によると、皇室領荘園のひとつである七条院の荘園であった田能庄の住人たちは、田能庄鎮守檜船神社の杜殿造営を行うとともに、五体の神像・仏像を造立した。これらは、現在も本神社と宮寺である神宮寺に納められている。中でも神宮寺所蔵の大日如来座像は、高槻市の有形文化財となっている。これ以外にも、田能庄について記載されている数々の文献が認められ、中世荘園村落と農民の構造を知るための貴重な史料を提供しており、それについての論功も数多く存在する。

田能地区は、鎌倉時代初期には丹波国桑田郡田能荘に属し、七条院（後鳥羽院の母）領の38箇荘のひとつで12世紀院政期に形成された膨大な皇室領荘園群の一つであった。高槻市史によると当時の田能庄の庄域は、田能、中畑、二料、杉生、出灰の地域であったとされ、荘園は、田能庄百姓（名主百姓）とそれに数倍いると推定される小百姓から構成されていると考えられている。これらから多くても40家族前後が、平地面積が最も広い田能盆地を中心に中畑盆地を含めた地域に居住していたものと想定している。

しかし、埋蔵文化財については、高槻市教育委員会によって遺跡分布調査が行われ、田能北遺跡、田能南遺跡が発見された以外には、実態が不明な地域であった。しかし、これまで当該事業による5年間の発掘調査によって徐々にではあるが、遺跡の状況が明らかになっている。

今回の中畑遺跡の発掘調査によって得られた成果は、前年度に比べて遺構・遺物の量は少なかったものの、以下のような新知見を加えた。

当初、前回までの調査成果から想定していた中畑遺跡の集落の初現は、中世であろうと考えて調査に入ったが、11区・13区において平安時代に遡る遺構が検出された。また、遺構は検出しなかったが、奈良時代末期から平安時代初期と推定される遺物も各調査区から出土している。これらにより、田能盆地東側に存在する極小規模な盆地である中畑地区の開発は田能盆地の開発と期を同じくして始まったことが明らかとなった。

今回の調査で田能・中畑地区を含めた当該事業に伴う発掘調査は、2000年度の田能地区内の遺跡確認調査を皮切りに実施した、2004年度で5ヵ年に及ぶ発掘調査は一応終了した。発掘調査地区は、ほ場整備事業によって削平される地区に限定して行ったが、調査対象地域は、田能地区および中畑地区のほ場整備地区のほぼ全域に及んでおり、北摂地域の山間小盆地に存在する遺跡の状況を知る上で重要な調査成果を提供した。これらの調査成果をまとめると以下の通りである。

旧石器から弥生時代の遺構・遺物

中畑遺跡では、7区から後期旧石器時代の翼状剥片、縄文時代早期においてはトロトロ石器、

有舌尖頭器などの石器とともに、それらに伴うと推定される剥片が出土している。このことからこれらの時代にも人々がこの周辺で生活していたことが明らかになった。それらに伴う遺構は削平されたものと推定され、全く検出されていないが、一定期間居住していた可能性が高い。また、田能地区の田能城跡においても石鏃が出土している。

弥生時代では、中期とされる磨製石鏃が同一区域から1点出土している。これ以外にはその時代に伴う遺構、遺物を全く検出していない。このことから弥生時代においては、定住はしていないものの、狩などを行うための生活範囲の場所であったものと推定される。

#### 奈良時代末期から平安時代の遺構・遺物

この地に人々が入植し、小規模ながら集落が営まれ始めたと考えられるのは、奈良時代末期から平安時代初期になってからと推定される。これ以前の奈良時代初期および古墳時代の遺構・遺物は検出されていない。

検出した最も古い遺構としては、田能北遺跡のI地区の建物1棟（9世紀前半）がある。平面形で方形に近い柱穴を伴い、梁間1間以上、桁行2間以上を測る。

平安時代前半（9世紀代）になると、O地区で検出した平安時代前半（9世紀代）と推定される建物1棟と炉跡群である。建物は、梁間は調査区外にあり不明であるが、桁行4間を測る。

平安時代中期になると、田能南遺跡D地区で検出した屋敷跡がある。母屋と推定される梁間1間、桁行5間と梁間1間、桁行2間の建物2棟および炉跡からなる。中畑遺跡では11区で検出した建物4棟、13区で検出した柱穴、炉跡がある。

平安時代後期になると、田能北遺跡E地区で検出した平安時代後期と推定される梁間1間以上、桁行5間の建物1棟がある。

平安時代末から中世にかけては、神宮寺西遺跡で検出した屋敷跡と推定される2棟からなる建物を挙げる事が出来る。屋敷跡は、梁間1間、桁行3間の母屋と推定される建物と梁間1間、桁行1間の建物からなる。時期的に檜船神社の棟札とほぼ同時期と推定される。

これらの調査結果から、田能および中畑などの小規模盆地によって構成された檜田地区は、京都、長岡京とも近く、遺構・遺物の初現が、奈良末から平安初期であることから京都盆地の大規模な開発（長岡京・平安京遷都）と深く拘っていたものと考えている。

#### 中世の遺構・遺物

中世になると集落の規模は急激に大きくなったものと推定され、広範囲にわたって集落が点在していたものと推定される。遺跡の分布状況から当時の集落は、盆地の周囲の丘陵端部に沿ってほぼ帯状に存在していたものと想定され、大部分は、周知遺跡外の現集落とほぼ重なるものと考えられる。

遺構としては、田能城跡の屋敷地、田能北遺跡、中畑遺跡を挙げる事が出来る。特に田能北遺跡L地区では、檜船神社の棟札に記載されていた住人を紡佛とさせる面積（約315㎡）を持つ屋敷地および屋敷墓を伴う建物群が検出されている。



中畑遺跡では、中世の遺構・遺物はほぼ全域で認められる。これらの中で最も広範囲に発掘調査を実施した中畑西地区の遺構配置からみた集落の状況について記したい。中畑西地区は、北の山塊から南に下る丘陵縁辺部付近に存在する。遺構を検出したのは、西端に存在する7区と東端に位置する8区である。遺構は、屋敷地と推定される遺構群が7区、8区の一部の区域のみで確認した。しかし、同一地区内の別の区域では、遺物は比較的多く出土するものの、顕著な遺構は検出されなかったことから遺構の空白地帯であったものと推定される。

屋敷地の遺構配置の状況は、母屋と推定される規模の大きな建物と、1棟ないしは2棟の作業小屋ないしは物置小屋と推定される小規模な建物で構成され、建物群の周囲を、柵ないしは、溝、土坑などによって取り囲んでいる。

屋敷跡の規模は、一部が調査区外に存在するものの、7区の面積は約150㎡、8区の面積は、約182㎡を測り、建物の数、規模とも8区の屋敷地の方が大きく、地区内での階層差を表しているものと推察される。

これら調査で得られた知見及び遺跡の立地条件などを総合し、中世の集落が存在する可能性のある地域・河川の氾濫源・山林であった可能性のある地域・水利などから稲作可能地域などを割り出した。その結果、盆地内における水田耕作可能な地域は限られ、中世においてはこれより耕地面積は少ないと推定している。現在のような景観が作り出されたのは、ため池の築造により盆地上部にまで用水が確保出来るようになったと考えられる、江戸時代に入ってからと推察される。このことは、これまでの発掘調査の成果をみても明らかである。

また、周辺の字名には、外畑・中畑の字名が認められることから水田耕作不可能な地域は、畑作が大々的に行われていた可能性も考えられる。

このことから当時稲作が本業であったとは考えにくく、現在でも一戸あたりの反別は少ない。時代は下るが、江戸時代の文献から、近世においてこの地方が京都の市場に木柴を出荷することで現金収入を得ていたことが記載されており、このことからこの時代にもそのようなことが行われていたものと推察される。現在も農業の傍ら薪作りを生業にしている家も存在する。

このことから、中世における現風景は、散村といった状況を醸し出し、家の軒数、屋敷地の位置は若干異なるものの、現在の集落の在り方と殆ど変わらないといえる。

これらの調査成果は、この周辺地域の歴史を考える上で、また北摂山地の開発の状況を知るうえで貴重な資料を提供したものといえる。以上のように檜田地区内の遺跡の在り方をみてきたが、これらの調査成果と文献史料とのすり合わせが部分的にはあるが、田能盆地及び中畑盆地のほぼ全域にわたって発掘調査を行ったことにより、以前より可能となり、古代から中世に至る集落構造が明らかになるものと考えている。今後の調査、研究に期待したい。

参考文献> 河音能平「中世荘園村落と農民の生活」高槻市史・第1巻本編1高槻市史編さん委員会 高槻市役所1977

富井康夫「高槻市」『大阪府の地名』日本歴史地名体系第28巻平凡社1986

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	なかはたいせきはくつちょうさがいようⅡ
書名	中畑遺跡発掘調査概要Ⅱ
副書名	府営農地還元資源利活用事業「樫田地区」の調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	奥 和之
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351
発行年月日	2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	面積 (㎡)	調査期間
		市町村	遺跡番号					
なかはたいせき 中畑遺跡	たかつきしおおあざ 高槻市大字  なかはた 中畑地内	27207	135	34° 57' 39"	135° 36' 22"	2004年6月10日 ) 2005年2月28日	3,334	農地還元資源 利活用事業 「樫田地区」
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
中畑遺跡	集落跡	平安時代		建物 3棟 炉跡 2基 風倒木痕 1箇所 柱穴群 1箇所 柱穴 多数		須恵器 土師器 緑釉陶器 鉄釘		
		中世		土坑 2基 溝 1条 風倒木痕 1箇所		須恵器 土師器 瓦器 青磁 白磁		
		近世		水田区画溝 2本 溝 1条		近世陶器		

## 中畑遺跡発掘調査概要Ⅱ

－ 府営農地還元資源利活用事業「樫田地区」の調査－

発行 大阪府教育委員会  
〒540-8571  
大阪市中央区大手前2丁目  
TEL. 06-6941-0351

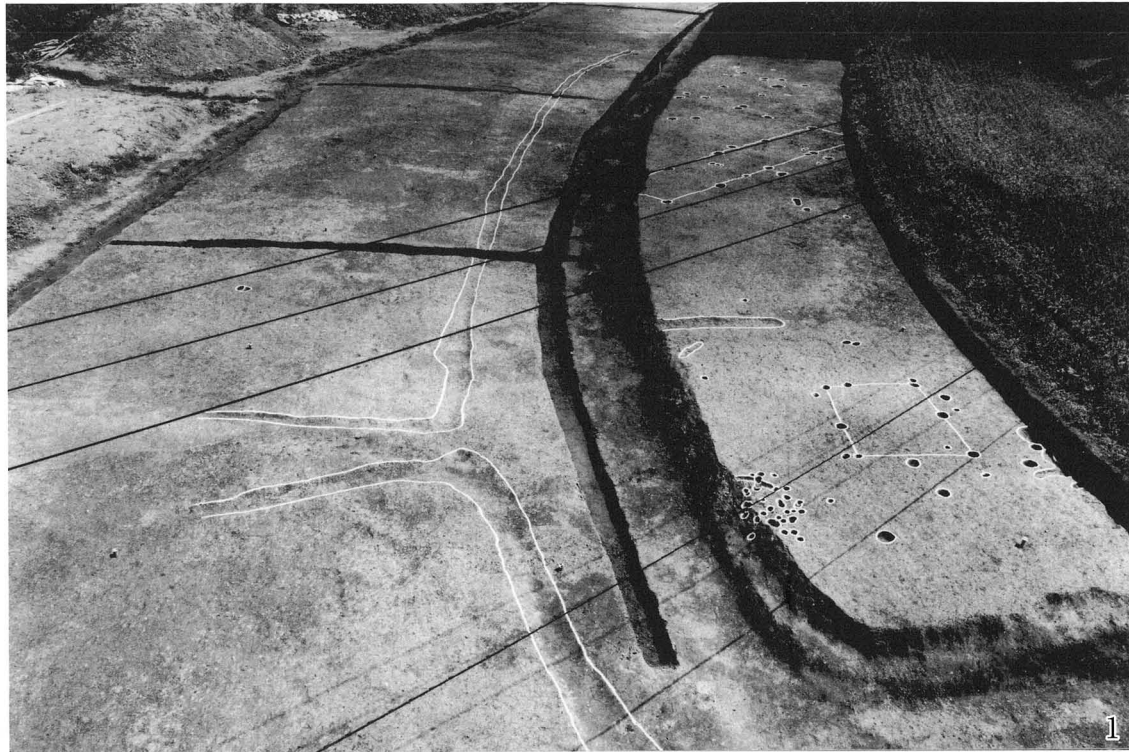
発行日 2006年3月31日

印刷 石川特殊特急製本株式会社  
大阪市中央区竜造寺町7番38号  
TEL. 06-6762-5851(代)

# 図 版



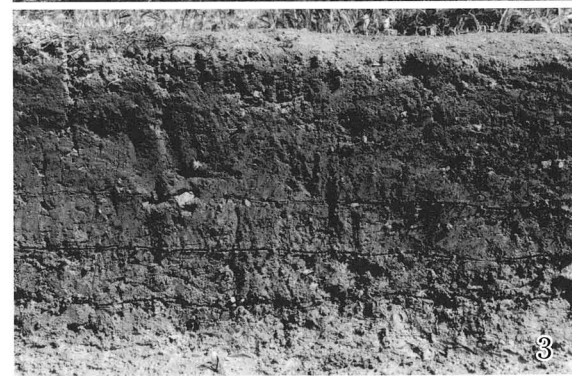
中畑地区全景（西上空より）



1. 全景 (西より)



2. 南側柱穴群 (南より)



3. 基本断面南壁

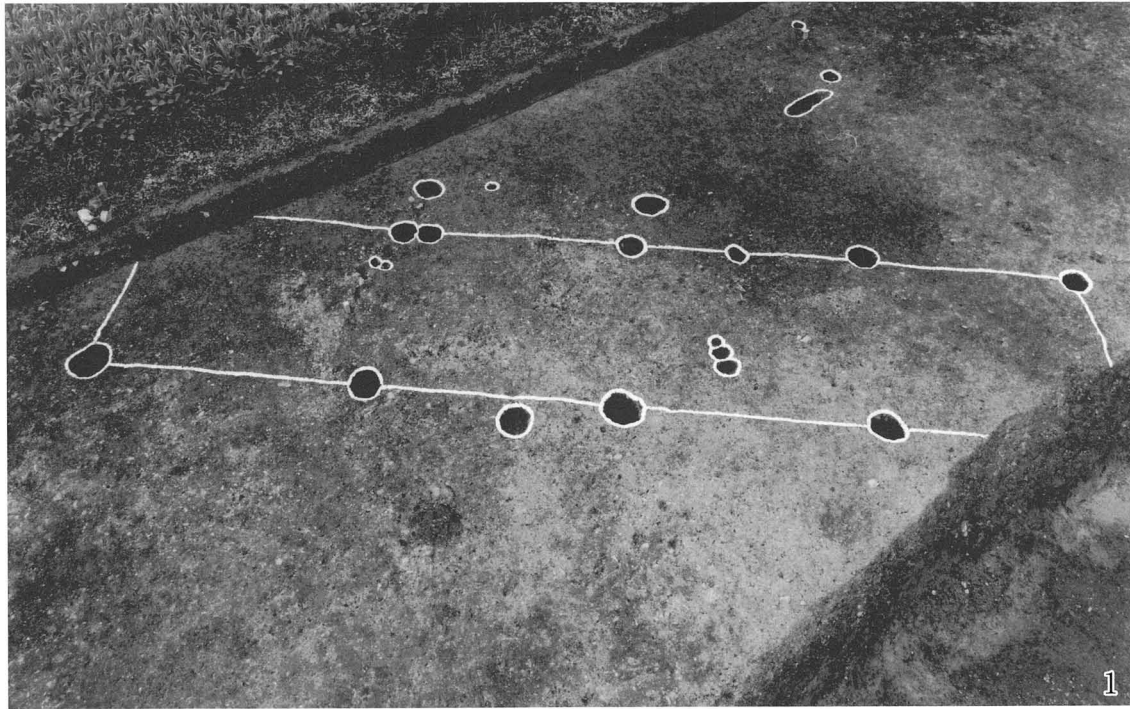


4. 基本断面北壁

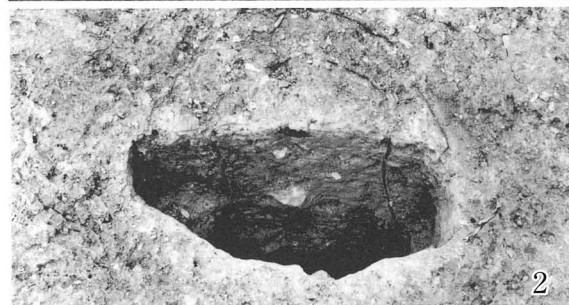


5. 基本断面西壁

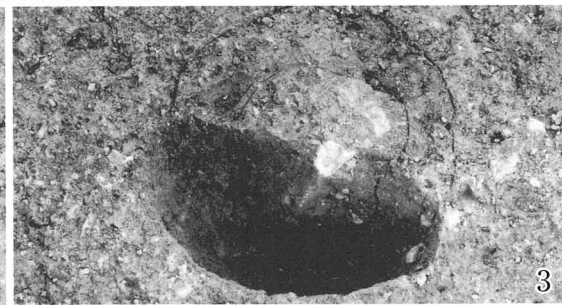




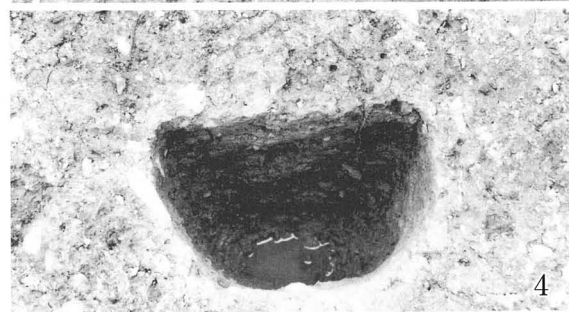
1. 建物 1 (東より)



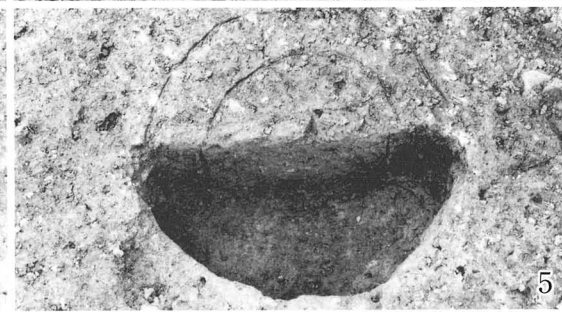
2. 建物 1 SP 1 断面



3. 建物 1 SP 2 断面



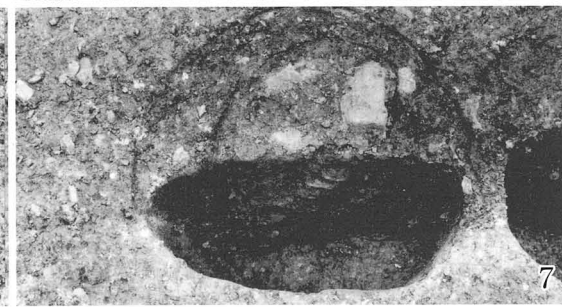
4. 建物 1 SP 3 断面



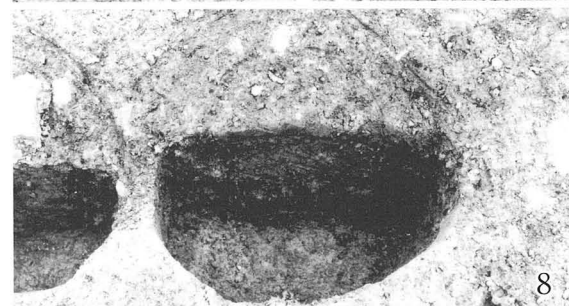
5. 建物 1 SP 4 断面



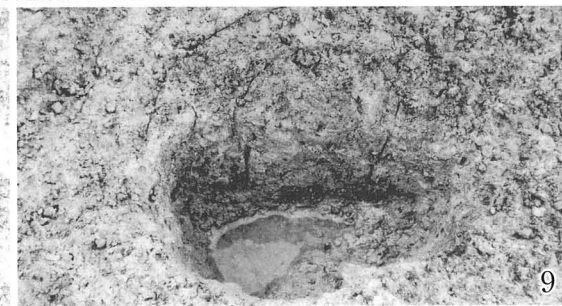
6. 建物 1 SP 5 断面



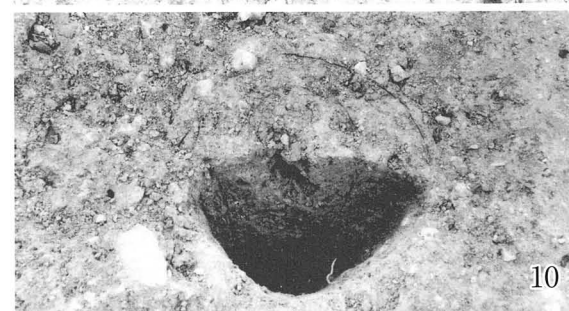
7. 建物 1 SP 6 断面



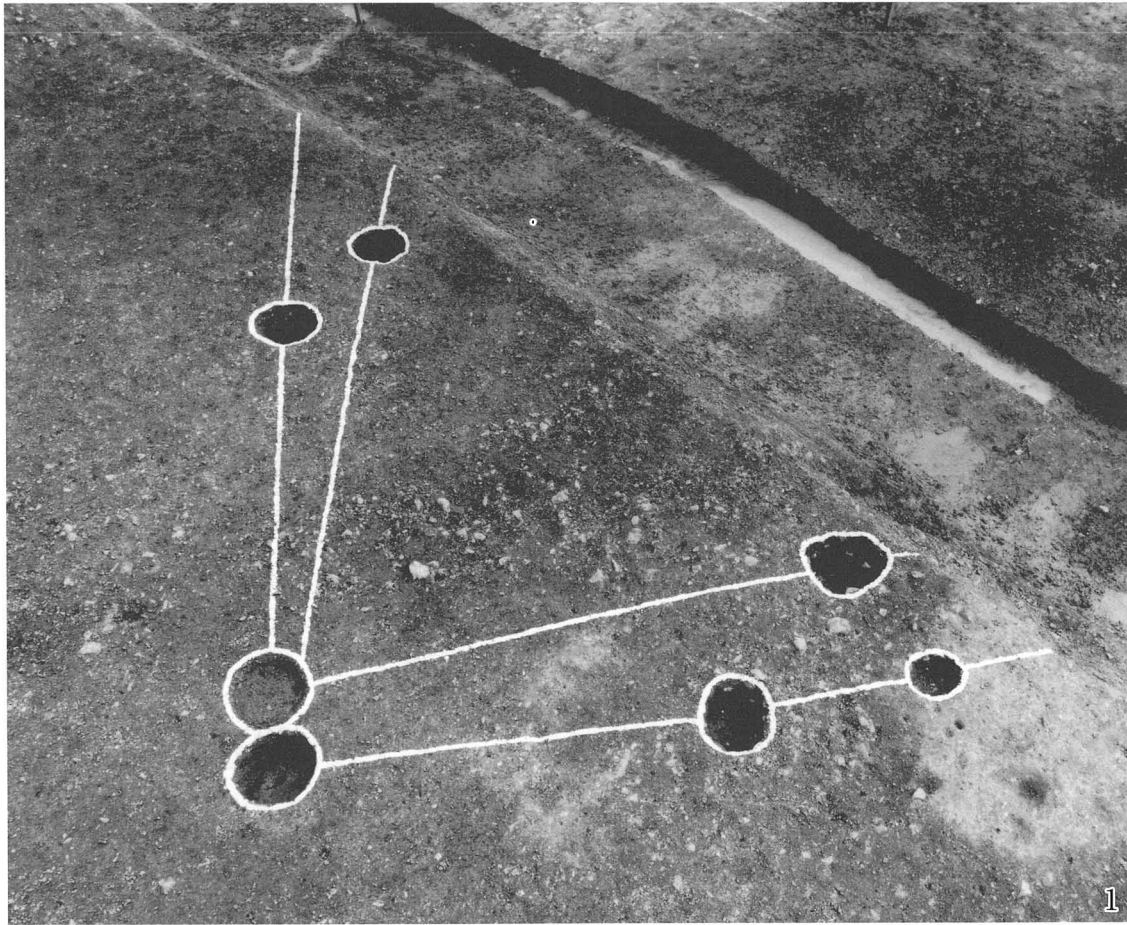
8. 建物 1 SP 7 断面



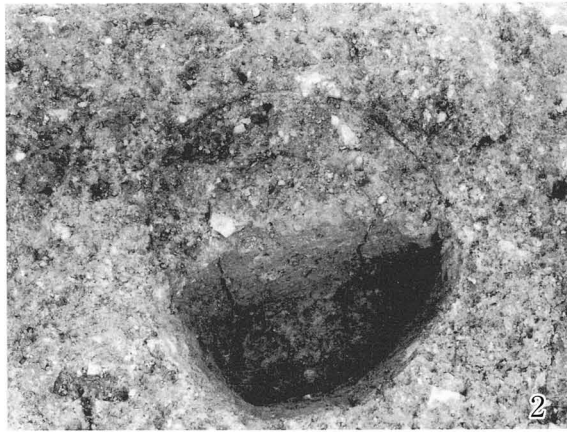
9. 建物 1 SP13断面



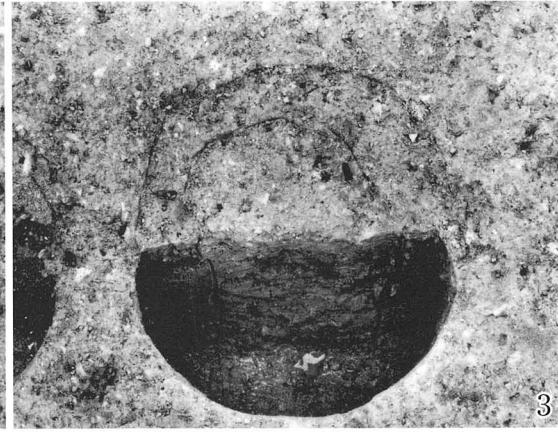
10. 建物 1 SP32断面



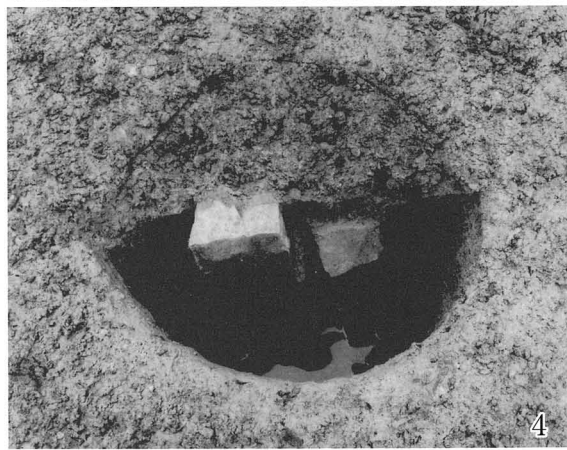
1. 建物2・3 (南より)



2. 建物2 SP10断面



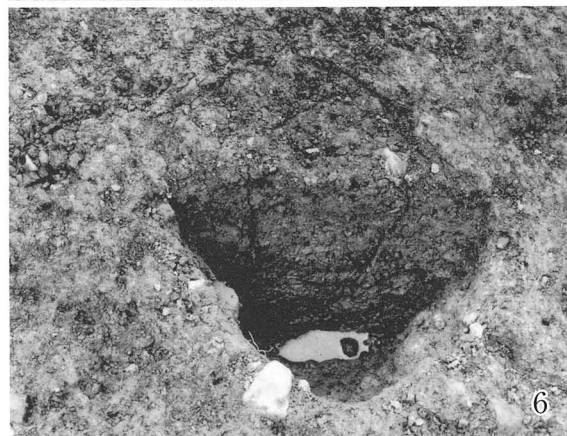
3. 建物2 SP11断面



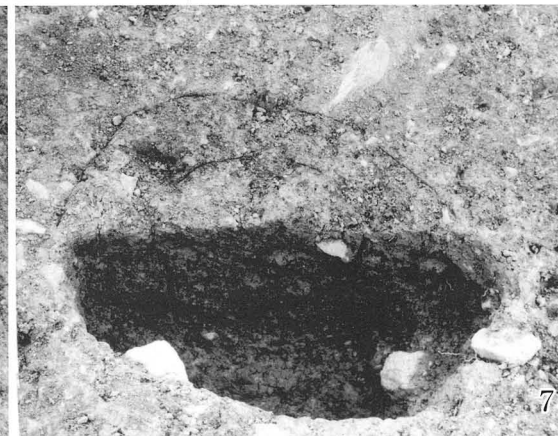
4. 建物3 SP15断面



5. 建物3 SP15  
遺物出土状況

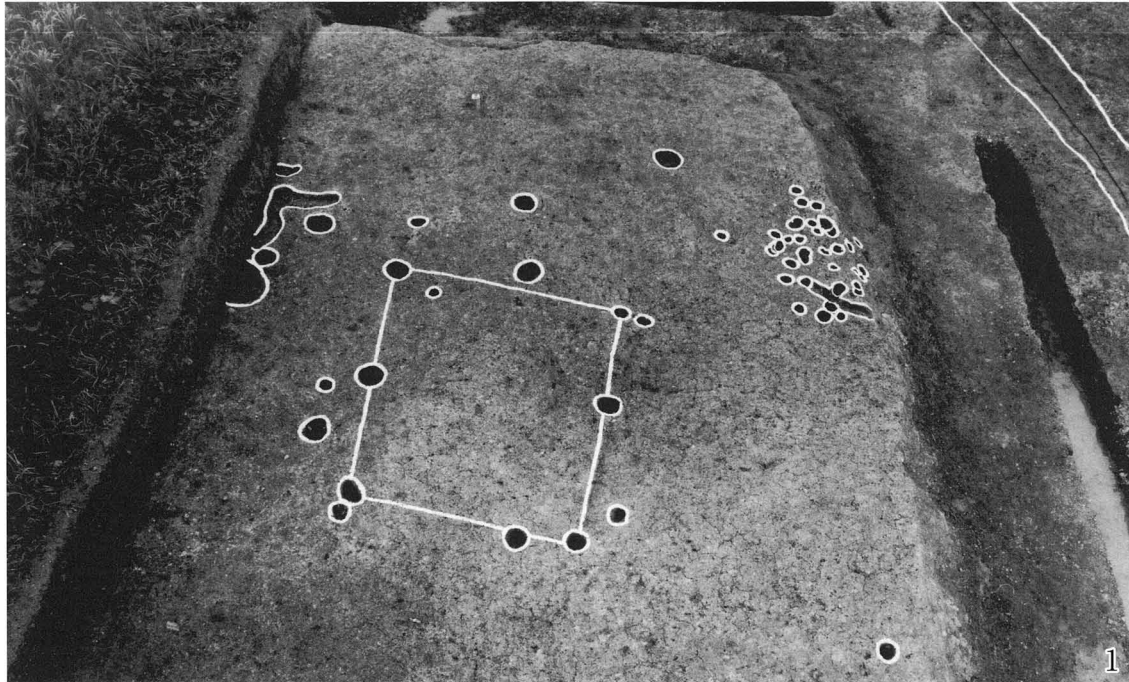


6. 建物3 SP16断面

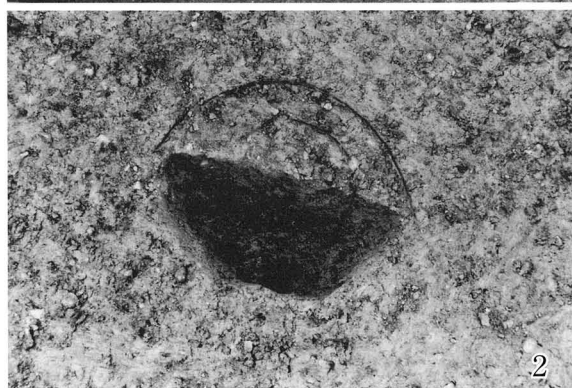


7. 建物3 SP17断面

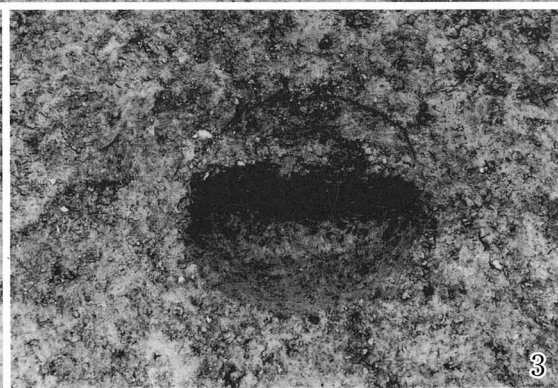




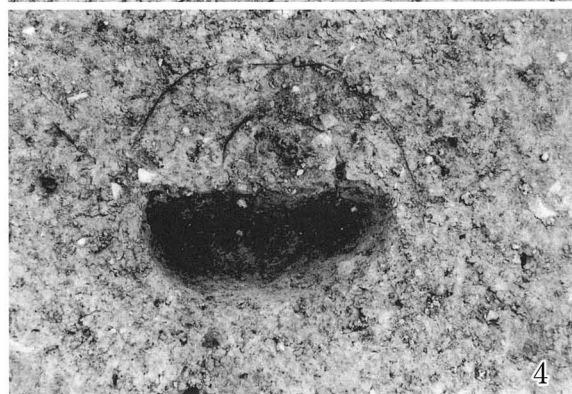
1. 建物 4 (北西より)



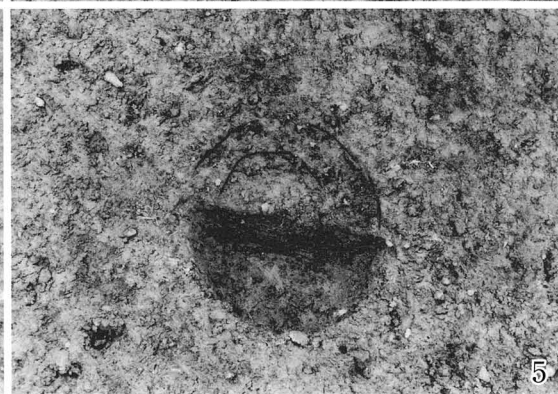
2. 建物 4 SP60断面



3. 建物 4 SP61断面



4. SP64断面



5. SP62断面



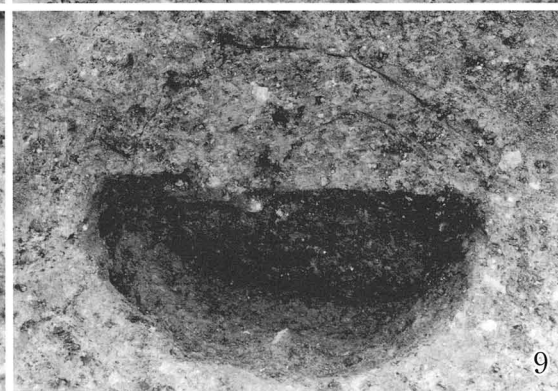
6. 南側柱穴群 SP46断面



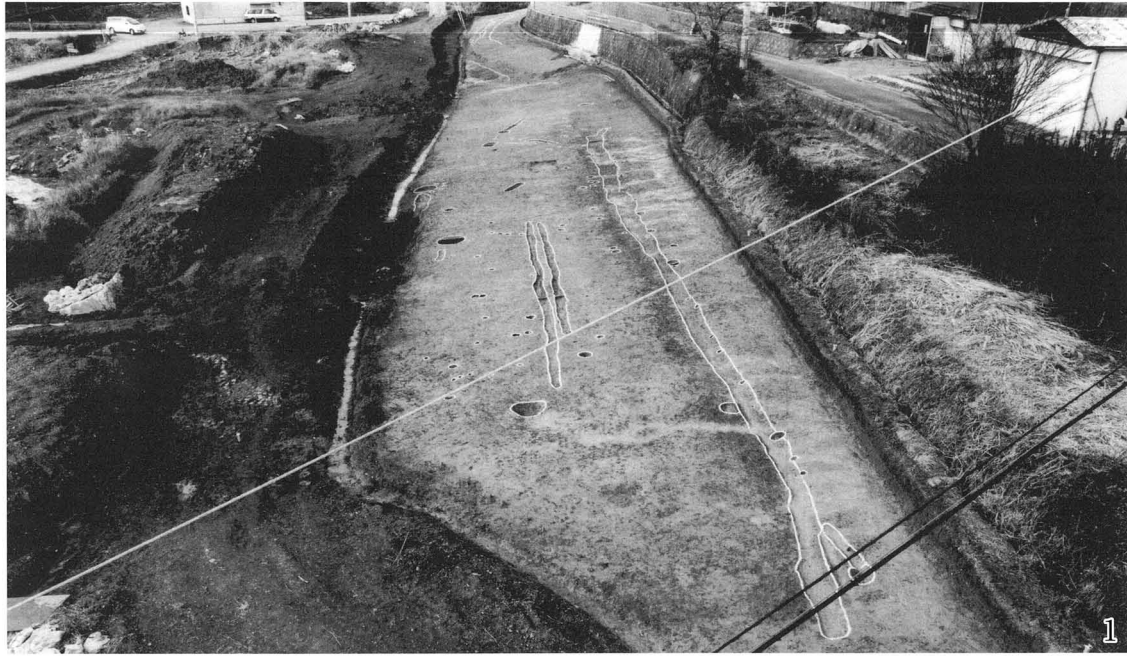
7. 南側柱穴群 SP54断面



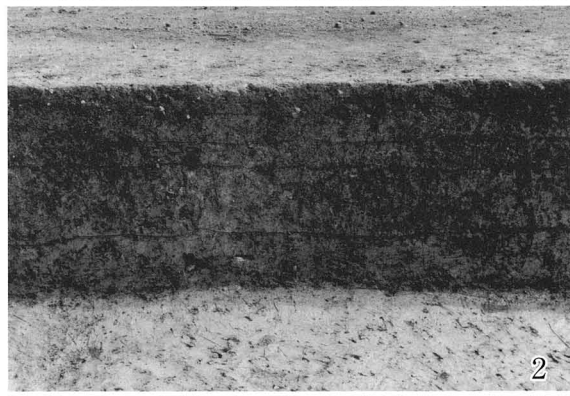
8. 南側柱穴群 SP57断面



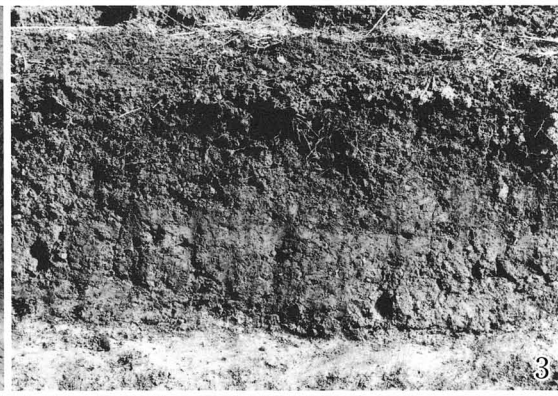
9. 南側柱穴群 SP58断面



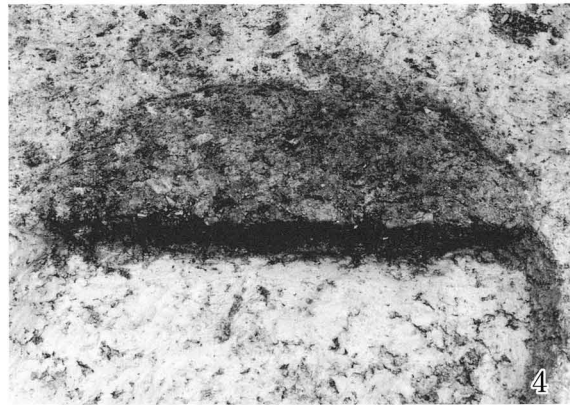
1. 12区全景 (南より)



2. 12区基本断面  
(埋積谷部)

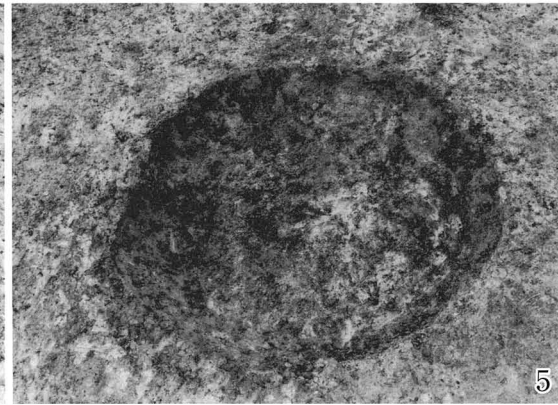


3. 12区基本断面  
(丘陵斜面部)

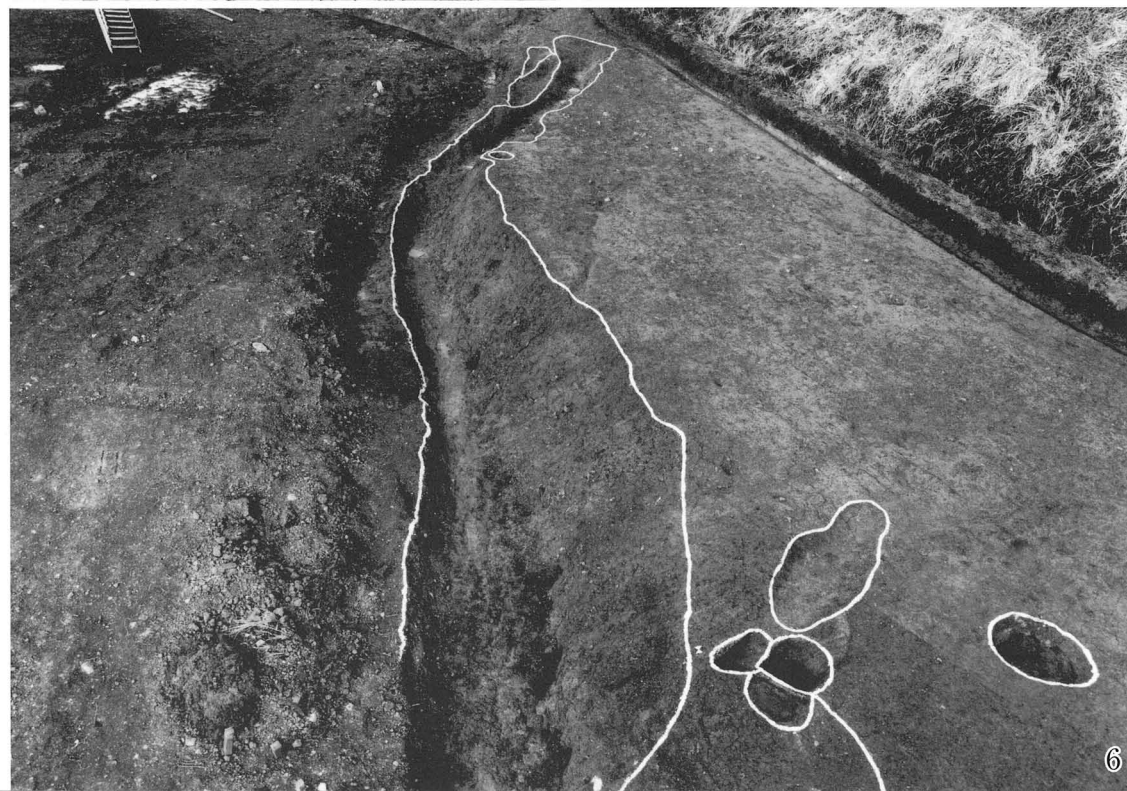


4. 12区土抗12-4 断面

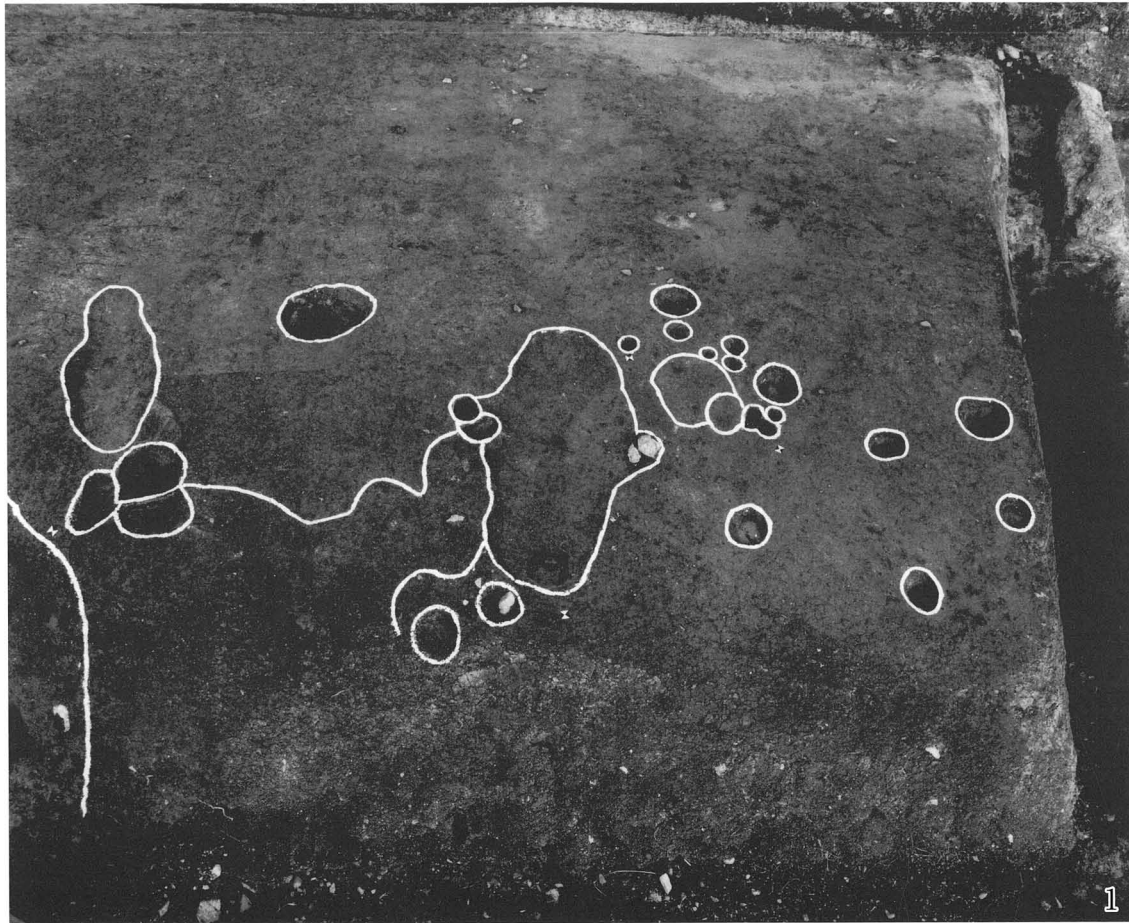
5. 12区土抗12-4  
(南より)



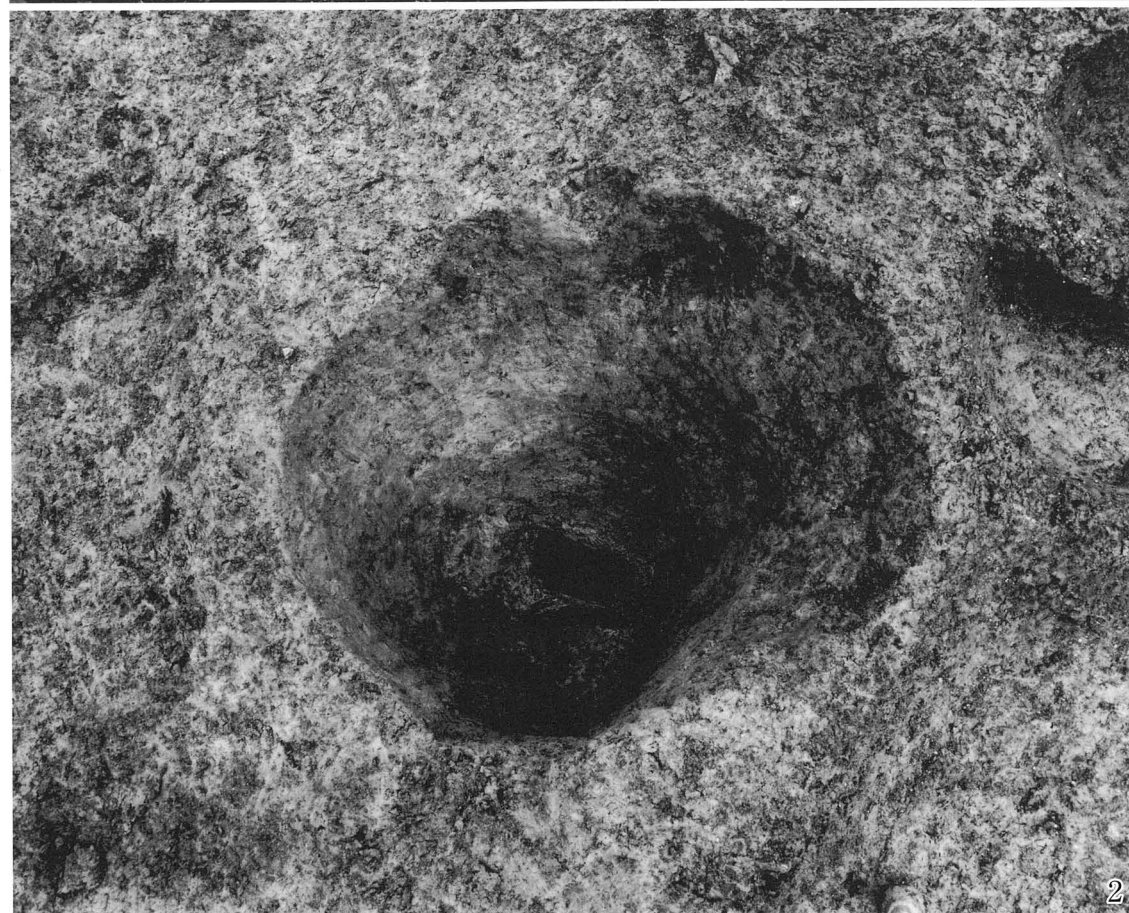
6. 13区溝13-12(南より)







1. 13区南側全景(西より)

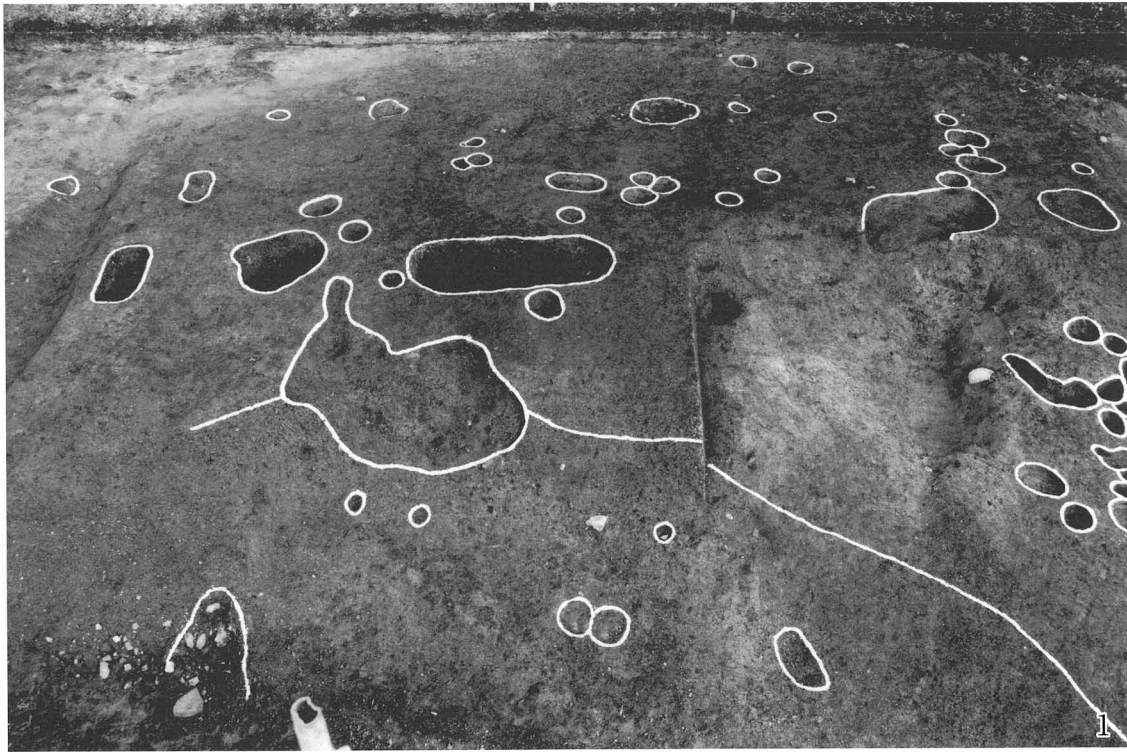


2. 13区柱穴13-15  
遺物出土状況(南より)

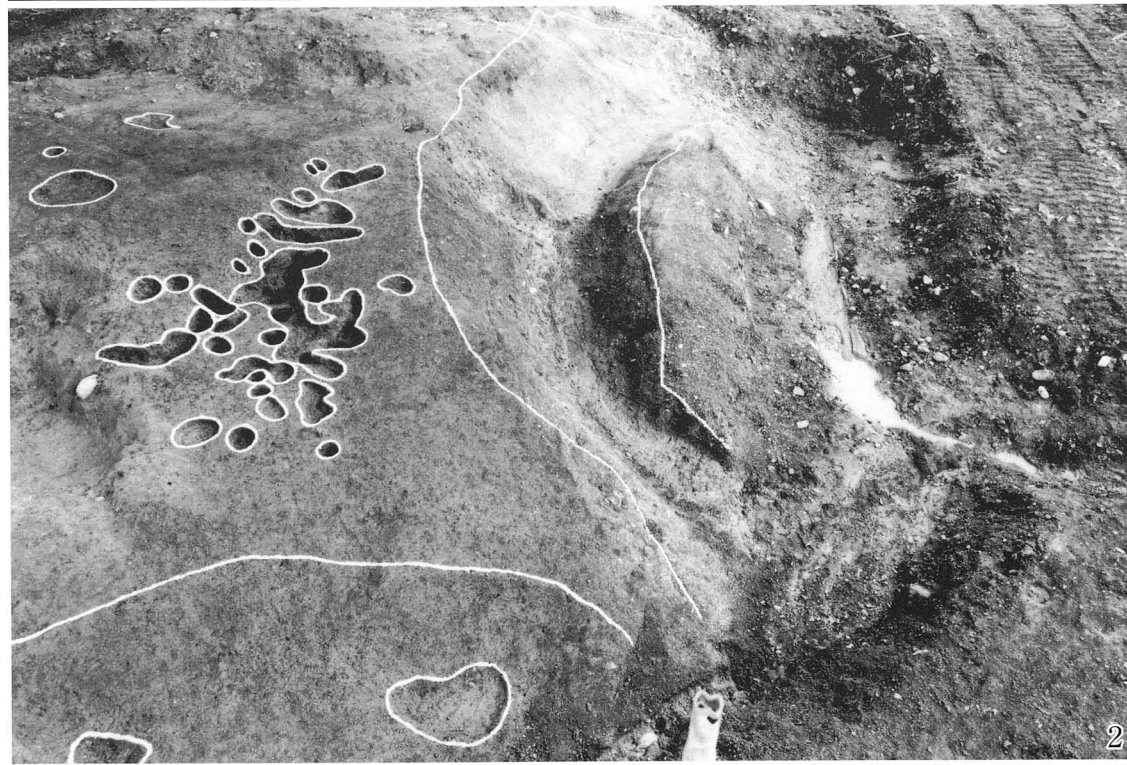


3. 13区基本断面  
4. 14区溝14-2 断面





1. 14区北側全景  
(北西より)



2. 14区南側全景(北より)



3. 15区全景(南より)





2



1



108



85



96



80



105



104



110



120

